

# 京城学派の人骨研究と戦時人類学

—今村豊の南柯一夢(?)と絆

全 京秀

## 序 「京城学派」

「学派」という語を用いるためには、それを満足させるだけの条件が備わらなければならない。学問にかかわる一サークルを示すこの用語は、構成員が存在し、構成員以外の者によって客観的に、そのサークルについて学派という語が使われた例がある場合に、一応認められると思う。日本の学界において「学派」という語が用いられた先行事例には「京都学派」があるが、その用例には次の二つがあげられる。一般的に、西田幾多郎と田辺元および彼らに師事した哲学者たちが形成した哲学の一派を示す場合、もう一つは、京都大学人文科学研究所を中心とした学術的な研究をその特色とする一派を示す場合である。このように、「京都学派」という用語が使われてきたことについてはさほど異議がないと思われる。

本稿で扱う「京城学派」は、過去の一時期には使われたが、近年ではほとんどその用例が見られないケースである。その用例を収集し検討する作業によって、「京城学派」という語に日本人類学史における市民権を獲得させるのが筆者の目的である。まず、「京城帝国大学時代は大学自体が草創期にあって、上田常吉、今村豊先生の指導のもと、小浜基次、鈴木誠先生等とともに、いみじくも泉靖一先生の名付けたという京城学派人類学の誕生、成長の中に育った。……京城学派人類学は我が国の人類学に強い印象を残し、その発展と今日像の形成に与って大きい」(木村 1983 : 303) という解剖学者の評価に注目したい。上に言及された5人は、植民地時代の京城帝国大学と密接な関係を持っていた人々である。京城帝国大学の教授を歴任した者や、同大学を卒業してその教員として務めた経歴を持つ人々であるが、彼らが京城帝国大学時代に「学術探検」という名称で実施した集団的な研究活動は最も異彩を放っていたと言える。また、「京城学派」に関するもう一つの用例は、「京城法学派」または「京城学派公法学」の検討過程から提案されたものである。「京城学派……彼らの眼中に、東京帝国大学はなかつた。朝鮮半島の大陸的気風のなかで、ベルリン大学をこそライヴァル視した京城学派の気宇は壮大であつた。彼らは、京城時代、盛んに独文で論文・書評を書いた。20世紀社会科学の最前衛で、欧州の僚友に伍して学問をしようとしていた。半島で鍛えられた思索の成果をもって、「帝国」日本の学知の島国的な狭隘さを打破することすら、そこでは企図されていたのである」(石川 2006 : 174) という評価は京城学派の性格を垣間見せると思うが、このような評価が他の分野においても適用可能かどうかについては検討が必要である。

2つの用例は、1945年以前の京城帝国大学における解剖学(体質人類学)や公法学の分野について述べたもので、前者は医学部、後者は法文学部の所属であった。解剖学者の

木村邦彦が前者について調査し、石川健治が後者に関する公法学界の様子を伝えている。両者とも、それぞれの学問において新しい傾向が形成される時に噴出してくる動きの一つを「学派」と表しており、自らの学問的な活動のアイデンティティにかかわる問題であることがわかる。本稿が注目する前者の場合、「京城学派」というサークルやその活動における最も中心的な人物は、医学部出身者ではなかったと思われる。私は「泉先生はその学派の事務局長的な位置」（藤本 1994：284）であったという指摘に注目する。石川が指摘した通り、「「帝国」日本の学知の島国的な狭隘さを打破する」側面が京城学派の特徴であり、このような傾向は解剖学についてもあてはまるのであるが、それは、泉靖一（京城帝国大学法文学部出身、後に東京大学文化人類学研究室主任教授）という一個人の活動領域が解剖学内部に留まらず、人類学分野にも拡大していったことに表れている。言い換えれば、京城学派がその背景にもつ大陸的な気質は、京城帝国大学を他の日本の帝国大学から分かつものであった。

具体的には、京城帝国大学で大陸を対象として実施された各種学術活動の詳細を検討することによって、京城学派が形成された背景や雰囲気をつかむことができると思う。京城学派をでっち上げようとするのではない。京城帝国大学を中心に展開された学術活動や構成員の動きを探ることで、後に登場する「京城学派」という用語がどれほどの妥当性を持つかという問題、すなわち学派の形成過程に関する記録の収集・整理を行うつもりである。なぜなら、この作業は学史を整理する過程において必須のものと考えてからである。ある地域における学問的な中心軸を探し、それを中心にして行われた活動や業績を整理し評価することが、学史を構成する一次資料の役割を担うと思う。さもないと、学史という領域の基盤がなくなってしまうだろう。今まで、評価に値する学史関連の著作が現れなかった主な理由の一つは、このような基礎的な作業の欠如であったと思われる。一つの学派と言える根拠が乏しければ乏しいほど、基礎的な資料の整理に意味を与え、先学たちの業績評価にはケチをつけないのが、このような作業を行う者の心得のはずであろう。「創られた伝統」の意味をもう一度反芻する必要がある。



写真1 京城帝国大学正門の校牌  
(現在は撤去されている)



写真2 現在の京城帝国大学医学部

「京城学派」という用語が少数の間ではあったが人口に膾炙していた頃、その一端で活動していた方々がいまだ存命中である。彼らの記憶に頼りながら、次の表1を作成した(全2010:42-43参照)。この表は二つの軸を中心に構成されている。一つは点線を中心とする左右の軸であり、もう一つは点線の右側に関する上中下の三段軸である。中央の点線は戦争終結の前後を示すもので、右側部分は京城帝国大学時代の活動である。左側部分は戦後の人類学分野に関連する重要な活動や京城帝大出身者たちに関係のある事項を整理したものである。戦前・戦後を一貫して整理し、京城学派と言えるサークルの活動内容や人物について一目瞭然でわかるよう示したつもりである。点線の右側部分は、以下で人類学分野の「京城学派」を再構成するため、考えうる人物をすべて網羅して示した一種の草案である。上段は法文学部を、中段は大学レベルの活動のうち人類学分野と密接な関連のある事項を、下段は医学部解剖学教室の体質人類学分野の人物を、それぞれ中心に構成した。したがって、この表そのものが、人類学分野の「京城学派」を決定するものではないことを予め断っておきたい。より厳密には、事実関係の詳細な再検討と、人物間の比重や均衡を考慮に入れた再調整が必要であることをご了承いただきたい。

表1 「京城学派」人類学の来歴(全2010:42-43)

<p>村武精一(一九二八)</p> <p>古野清人(宗・九大、人文諸科学総合班長)</p> <p>幹事長・泉靖一(族・明大)、幹事・鈴木二郎(族・早大)、小堀巖(地・東大)</p> <p>助手・蒲生正男(人・広大)</p> <p>委員長・辻村太郎(地・東大)</p> <p>副委員長・今村豊(人・広大、現地調査隊長、北村精一(人・長大、長崎大学班長、)</p> <p>厚生省博多引揚者救療部(二日市保養所(一九四六―四七))</p> <p>朝鮮總督府庶務(一九四六・五)「自然退官」</p> <p>軍政庁移動辞令第二八号「罷免」(一九四五・一一三)</p> <p>移動医療局(Medical Relief Union)：一九四五・一一</p> <p>「八学連」(一九五〇・五)「対馬調査」</p>	<p>安藤喜一郎(？―?)</p> <p>泉靖一(一九一五―一九七〇)</p> <p>鈴木榮太郎(一九四一―一九六六)</p> <p>・一九四二・四―一九四五・一〇</p> <p>以和(趙)明基(一九〇五―一九八八)</p> <p>・一九四二・四―助手</p> <p>朝鮮農科調査隊(一九四二夏)</p> <p>朝鮮仏教史学会(一九三八)</p> <p>尾高朝雄(一九九一―一九五六)</p> <p>訪蒙医学親善団(一九四〇)</p> <p>鈴木誠(一九一四―一九七三)</p> <p>・一九四二・四―助手</p> <p>京城社会学会(一九四二・五)</p> <p>大陸資源科学研究所(一九四五・六)</p>	<p>柳洪烈(一九一―一九九五)</p> <p>・一九三五・四―一九三八・三助手</p> <p>眞木琳(任断等)(一九〇三―一九九七)</p> <p>・蒙疆學術調査隊(一九三七―一九四四)</p> <p>大陸文化研究会(一九三八)</p> <p>島五郎(一九〇六―一九七七)</p> <p>滿蒙文化研究会(一九三三)</p> <p>蒙古文化研究会(一九三三)</p> <p>大蒙古学術調査隊(一九三七―一九四四)</p> <p>尾高朝雄(一九九一―一九五六)</p> <p>訪蒙医学親善団(一九四〇)</p>	<p>岩崎継生(一九〇七―一九六九)</p> <p>・一九三〇・四―一九三三・八</p> <p>宗教及社会学研究室(一九三二―一九四二)</p> <p>(民族学Ⅱ文化人類学)</p> <p>民俗参考品室(一九二八―陳列館一九四二)</p> <p>赤松智城(一九八六―一九六〇)</p> <p>・一九二七・九―一九四二・三</p> <p>秋葉隆(一九八八―一九五四)</p> <p>・一九二七・二―一九四五・一〇</p> <p>今村豊(一九八六―一九七二)</p> <p>・一九二六・五―一九四五・一〇</p>	<p>法文学部</p> <p>〈京城帝国大学〉(一九二六・五―一九四五・一〇)</p> <p>医学部</p> <p>解剖学教室(体質人類学)</p>
--	--	--	--	--

日本の学問において、近代的な意味での自然科学、とりわけ医学分野はドイツの影響が絶対的であったと言っても過言ではなく、かつその淵源を遡ればかなりになる。19世紀末、中国山東省の青島に租借地を設けたドイツは、日本帝国と密接な関係を結んで医学分野の専門家を日本へ派遣した。彼らの活動範囲は、(植民地以前の)朝鮮にまで及んだ。そのことは、エドウィン・ブンシェ博士の一例から読み取れる。当時、日本で出版されていた医学分野の専門雑誌のアブストラクトはすべてドイツ語で作成され、論文そのものもドイツ語で書く場合が少なくなかった。その延長でもあるが、高等学校の教育ではフランス語とともにドイツ語が重要な部分を占めていた。フランス語は主に人文系統に、ドイツ語は自然系統に絶対的な影響力を振っていたことは周知の通りである。

そもそもヨーロッパにおいて、“anthropology”とは体質人類学を意味するものであり、比較解剖学の役割とかなり似通った伝統を有している。それに対して、文化人類学に当たる領域は“ethnology”と表記され定着してきたが、この歴史的過程について付言する必要はなかろう。したがって、日本に輸入されたヨーロッパの“anthropology”は、医学部解剖学教室で行われていた比較解剖学の領域と重なったと言える。比較解剖学と体質人類学はほとんど同義語として用いられるほどで、体質人類学は解剖学教室の専有物のように思われていた。これは帝国主義時代における人類学の一つの側面であったと言っても過言ではない。そして帝国主義時代の体質人類学は「人種」を区別する道具として利用されていたことを想起せねばならない。体質人類学者たちは解剖学的な用語や道具を用いて考古学的な発掘資料に登場する人骨を測定し、さらにその延長線上に、生きている人々の人骨測定を試みた結果、人体計測学(anthropometry)という細分野まで開発された。体質人類学者たちは世界地図を「人種」で区分する図表の製作に取り組んだ。図表作成のために探検を行い、人々を測定し、写真を撮り、肌色を区分する方法として「人種」という観念を用いて、その現象の存在や区分の正当性を主張した。そのような研究結果は、社会進化論を支持し「野蛮」と「文明」を区分する基準になり、文明世界が野蛮世界を統治するという政治的状況を正当化する道具として使われるなど、帝国主義の武器として利用されたことは否定できない。

京城帝国大学の本科が始まった1926年から、医学部には解剖学教室が割り当てられた。当時の帝国大学の解剖学教室には通常2つの講座が設けられていたが、京城帝国大学の解剖学教室には第三講座まで割り当てられ、講座主任は当初から1945年の廃校まで今村豊(1896-1971)が務めた。彼が行った講座の内容は、一貫して体質人類学の一部である骨学(osteology)であった。彼は京都帝国大学解剖学教室の足立文太郎の門下生で、京城帝国大学に勤めた20年間、アジア大陸の人骨に関する研究を中心に行った。彼が弟子の田中正西に宛てた葉書(1970年8月3日付)には、「畏友、金関丈夫君(九大名誉教授)」(田中1972:47)と記されている。同じ時期に、京都帝国大学解剖学教室の同学であった金関丈夫が、台北帝国大学の解剖学教室で体質人類学を主に担当していたことを併せて考えると、京都帝国大学出身の体質人類学者は、日本帝国の西の延長ともいえる朝鮮や台湾などの植民地を拠点にして、アジア大陸に体質人類学を展開したと評価できる。その一方で、東京帝国大学理学部人類学教室(医学部解剖学教室を含む)は、アイヌをはじめとする東日本の考古学的人骨や南太平洋の島嶼地方に関する調査を行った。このよう

な分業は意図されたものとは言えないが、結果として一つの学風として語ることが可能な基礎的資料としての意味を持つ。

以上が帝国日本の体質人類学への一つの視点になるのだが、今村豊はこのような構図において重要な役割を担った人物として評価できる。日本の学界において、金関丈夫に関する研究や評価はかなり蓄積されているのに対し、今村についてはなぜかこれまで誰も注目してこなかった。本稿は、学史という次元から今村に注目する必要があることを認識し、彼の学問的業績のみならず、その研究活動の過程から明らかになる事実を集めて紹介することを目的とする。なお、これまで今村に関心が寄せられなかった理由についても整理しつつ、戦前の活動に関して戦後の日本の学界がとってきた態度についても間接的に議論を投げかけようと思う。なぜ、植民地朝鮮で行われた学問的な業績は評価されてこなかったのか。植民地台湾で活動した研究者に関する評価や研究はかなり進んでいるのに対し、なぜ植民地朝鮮についてはそうならないのか。これらについての説明が、次のステップのための礎石になることは間違いない。

私はこの報告書の副題を「今村豊の南柯一夢(?)と絆」とした。「(?)」を付した理由について説明が要るだろう。李公佐(8世紀中頃～9世紀初頭、唐)の著書に『南柯太守伝』(802年)がある。淳于棼という主人公に関する物語で、その内容は、淳于棼が大槐安国南柯郡の太守になって所願成就と栄耀栄華を叶えたが、すべてが現実ではなく夢であったというものである。この物語に因んだ熟語が南柯一夢であるが、私はこれに「(?)」を付した。「南柯一夢」で終わるなら、今村は淳于棼になってしまうが、「(?)」に、それとは異なる可能性が残っているという希望を込めたのである。その可能性とは、「朝鮮人全身骨格300体、満洲北支人骨100体、蒙古人骨200体、パプア人頭骨70体蒐集」(島1957:i)した今村の体質人類学的業績が無視できないからである。消えた人骨はどこにあるのか。それらの存在が確認できれば、今村を始めとする京城学派の人骨研究が持つ意味を新たに証明する機会になるはずである。金関が行った台北帝大の人骨蒐集に関する再研究が最近進行しているのをみて、これからは蒐集された人骨に関するDNA研究が可能であることを考えると、今村の作業が南柯一夢には終わらないという蓋然性がある。私はその蓋然性にかきたい。

少なくとも670体の人骨の所在を把握することも、これから我々が関心を持つべき問題である。その所在の可能性は三つ挙げられる。第一、第二次世界大戦の直後、ソウルに駐屯した米軍が収集した可能性が高い。なぜならば、1945年9月9日、ソウルに進駐したアメリカの第8軍の司令部は京城帝大医学部にその本部を設置したためだ。第二の可能性は、朝鮮戦争の当時、北朝鮮軍が持ち去った可能性が少なくともある。第三として、現在のソウル大学校医学大学に付属する建物に眠っている可能性も排除できない。

## 1 城大解剖学教室と今村豊

朝鮮総督府は総督府医院としての施設を備えるため、1916年に京城医学専門学校を設立し（1916年4月1日付、勅令80号「朝鮮総督府専門学校官制」公布）、久保武を解剖学教授として招いた。大韓医院附属医学校の教官であった久保武は、朝鮮総督府医院医官を経て、京城医学専門学校教授（1917年）に就任した。『京城日報』（1916年7月9日付）に「人種解剖専攻」として紹介された彼は、「毛髪の人類学」（全8回）および「人種解剖学より見たる朝鮮人」（全2回）を『朝鮮及満洲』に掲載して「体質的人類学乃至人種解剖学」について語った。それらの論文は典型的な19世紀風の人種主義に基づいたもので、彼の用いた方法の多くは実証が伴わない闇雲な人種解剖学であり、厳密な人体計測に基づく体質人類学的業績とは言い難かった<sup>1</sup>。

1919年、京城医学専門学校の教授に赴任した上田常吉（1887-1966）は東京帝大出身で、京城帝国大学医学部が設立されると解剖学教室第一講座の担任となった。彼は医学統計の専門家としてよく知られていた。



写真3 久保武

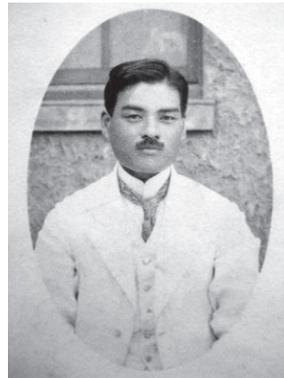


写真4 上田常吉

長崎出身で第五高や京都帝大に修学した「今村豊教授はその風貌とともに、一種の名物的な存在である。元来、解剖学教授には一切の神経質型が多いが、今村博士は正反対である。帽子を被り、パイプをくわえて校内を闊歩する。学生時代に水泳選手であって、現在城大水泳部長を担っている。京都帝大医学部を1921年に卒業した後、しばらく母校の教室で助手を務め、1924年に京城医専の講師職を得て洋行したが、城大開校とともに解剖学第三（三）講座担当（彩雲1936：36）の助教授に赴任したのは1926年4月1日であった。1928年4月18日には教授に昇任した。今村は医学部1年生に「系統解剖学」

<sup>1</sup> 久保武の著作について簡略に紹介しておく。但し、これらは彼の全文献の一部に過ぎない。「毛髪の人類学(1)」『朝鮮及満洲』103：75-77（1916.2.1）、「毛髪の人類学(2)」『朝鮮及満洲』104：63-68（1916.3.1）、「毛髪の人類学(3)」『朝鮮及満洲』105：57-59（1916.4.1）、「毛髪の人類学(4)」『朝鮮及満洲』106：46-50（1916.5.1）、「毛髪の人類学(5)」『朝鮮及満洲』107：72-77（1916.6.1）、「毛髪の人類学(6)」『朝鮮及満洲』108：54-60（1916.7.1）、「朝鮮人の人種的特徴」『京城日報』35（1916.7.9）、「解剖上より見たる女の體質的特徴」『朝鮮及満洲』109：52-58（1916.8.1）、「毛髪の人類学(7)」『朝鮮及満洲』114：51-55（1916.12.1）、「人種解剖学より見たる朝鮮人」『朝鮮及満洲』115：72-77（1917.1.1）、「毛髪の人類学(8)」『朝鮮及満洲』116：55-59（1917.2.1）、「人種解剖学より見たる朝鮮人（二）」『朝鮮及満洲』117：58-61（1917.3.1）。

(相馬 1993 : 54) を講義した。彼は自らの「光頭」(「禿頭」より「光頭」という言葉を好んだという) について文章で公表するほどで、彼に会った人々は誰も「光頭」をまずその印象として思い浮かべた。

解剖学教室の今村豊の研究を解剖学とせず、あえて「人類学」あるいは「体質人類学」と呼ぶ理由は、当時の日本学界の潮流と関連している。19世紀末から20世紀初めにかけて、東京帝国大学では理学部動物学教室で人類学を担当していた坪井正五郎と医学部解剖学教室の小金井良精との間に、日本人の人種的起源についての長年の論争があり、その過程では考古学的な発掘資料であった古人骨とアイヌに対する人体計測学が用いられていた。京都帝国大学では、主に貝塚や古墳から発掘された古人骨を対象に、濱田耕作の考古学研究室と足立文太郎の解剖学教室がそれぞれ、あるいは共同で研究を行う雰囲気があった。解剖学教室において考古学の発掘資料であるドルメンに関する研究を行うなど、このような傾向は体質人類学と名付けられた伝統が、京城帝国大学にも受け継がれていたことを物語っている。したがって今村豊が朝鮮の雄基貝塚と新羅古墳の人骨(今村 1931, 1932) や楽浪古墳から出土された人骨(今村 1933) に関する研究を発表したのはきわめて自然な流れであって、このような研究を人類学あるいは体質人類学と名付けたのもまた当然のことであった。

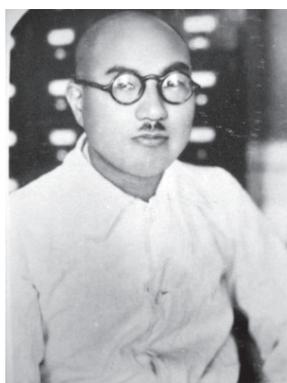


写真5 今村豊

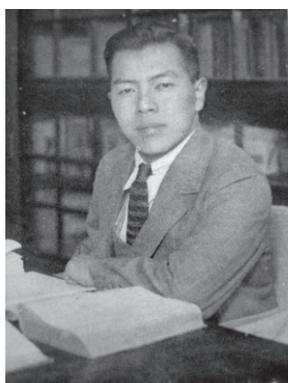


写真6 小濱基次



写真7 島五郎

1934年4月1日から2日間、東京人類学会創立50年記念大会が東京帝国大学法文経済1号館第11教室で開催された。全46本の発表論文のうち、初日の最初の分科4本と初日午前の最後の分科1本、計5本の論文が城大出身者のものであった。5本の論文タイトルと発表者は次の通りである。「現代朝鮮人体質人類学補遺(頭蓋骨の部): 島五郎(京城帝大解剖)、朝鮮人靱帯骨盤の人類学的研究: 小濱基次(大邱医専解剖)、平安南道朝鮮人の体勢に就て: 田邊秀久(平壤医専解剖)、極東諸種族の相互関係: 今村豊(京城帝大解剖)、相関係数の簡便なる新計算法に就て: 上田常吉(京城帝大解剖)」(『ドルメン』1934.4 : 52)。特にこの大会で、「京都帝大の清野研究室の統計法の欠陥を京城帝大の上田常吉が指摘し、……清野は門弟の中山英司などを京城に派遣して半年の間に上田に修学させた。……上田は戦前の人類学者の中で最高に統計を得意とした人物で京城大学

の解剖学教授であった」(寺田 1975 : 202)。言い換えると、当時の京城帝大の解剖学教室で行われていた体質人類学的研究は短い期間であったにもかかわらず、帝国日本の学界が認めざるを得ないほどに高い水準の成果を誇ったと言えよう。

そして、京城帝大の今村豊の解剖学第三講座は体質人類学教室であったと言っても過言ではなかった。人骨を蒐集し、主に頭蓋骨や身長を測る方式の研究が行われたことが知られている。その主な内容は、体質人類学の一部分をなす骨学に他ならなかった。教室の他の構成員や、教室出身で平壤医専や大邱医専などで教員を務めた後学たちも、共同で朝鮮人の体質人類学的な研究結果を『朝鮮医学会雑誌』に発表している(荒瀬・小浜・田辺・高牟礼 1934、荒瀬・小浜・島・西岡・田邊・高牟禮・川口 1934)。

東京の雄山閣は人類学・先史学講座全 19 巻を出版したが、第 1 巻が 1938 年 5 月 5 日、第 19 巻が 1940 年 12 月 31 日に刊行された。すなわち、2 年半の間に、当時における体質人類学および先史学の学問的成果を網羅する全 98 本の論文や関連資料が企画出版されたことになる。民族学的な論文としては、第 6 巻に収録された宗教民族学者・宇野円空の「原始民族と宗教」が一つあるだけであった。第 4 巻(1938 年 9 月 10 日刊行)の論文 5 本中 4 本が城大出身の成果であり(上田常吉:統計法、今村豊:骨学、島五郎:朝鮮人の骨格、小濱基次:朝鮮人の生体計測)、第 7 巻(1939 年 2 月 15 日刊行)の論文 3 本中 2 本が城大出身の成果であった(今村豊・島五郎:北滿諸民族の体質人類学、今村豊:朝鮮人の体質に関する文献目録)。

## 2 「満蒙」と「大陸」の今村豊

朝鮮人の体質人類学的研究に集中していた今村豊であるが、やがて彼の研究は、激変する中国大陸情勢に動員されるようになった。当時、彼らの研究段階は、ある一定の成果を出したと言うにはまだ早い時期であったことを指摘しよう。言い換えれば、たった 5 年余りの期間で出来上がった成果は、やっと研究の土台を作り上げる程度のものであった。そこから一定の結論を導くのは、至極無理なことであったに違いない。そのため現在においても、我々は今村の朝鮮人に関する体質人類学研究をまとめ上げるために十分な資料を整えることができないわけで、一定の結論については後日を待たねばならない状態である。今村や彼の教室で行われた研究の過程は、未だ準備段階に留まっているのである。

満洲事変(1931 年)が勃発した後、京城帝国大学は学長を会長として満蒙文化研究会を結成(1932 年)し、「満蒙文化ノ學術的研究及ビ調査ヲ目的トシ併セテ満蒙ニ関スル知識ノ普及ヲ図ル」目的で人文科学(6 部門)や自然科学(4 部門)を網羅する機構を組織した。人文科学の内容は「満蒙ニ関スル歴史及ビ地理」「満蒙ニ於ケル遺跡及ビ遺物」「満蒙諸民族ノ言語、宗教及ビ民俗」「満蒙ニ関スル經濟及ビ産業」「満蒙ニ関スル舊慣及ビ法制」「其他満蒙ニ関スル人文科学的研究事項」であり、自然科学の内容は「満蒙諸民族ノ体質人類学」「満蒙ニ関スル薬物学」「満蒙ニ於ケル動物、植物及ビ鑛物」「其他満蒙ニ関スル自然科学的研究事項」であった(京城帝国大学満蒙文化研究会規約、昭和 7 年 12 月

17日設定参照、イタリック体は筆者による強調)。全10部門の項目を一瞥すると、当時の京城帝国大学が動員できた学問分野の総計と同じ水準であったことがわかる。このうち、とりわけ人文科学の「満蒙諸民族ノ言語、宗教及ビ民俗」と自然科学の「満蒙諸民族ノ体質人類学」は、他の項目とは異なり、その対象を「満蒙諸民族」と設定したのが注目に値する。私はこれこそが、後日の京城学派人類学が登場する温床となり、京城学派の特徴として、人文科学与自然科学の総合的な共同研究を挙げる根拠にもなったと思う。

法文学部の宗教学講座を担当していた赤松智城（1886年生まれ）や社会学講座を担当していた秋葉隆（1888年生まれ）は、満蒙文化研究会の結成以前から、帝国学士院の研究費支援により、共同で「朝鮮の巫俗」についての研究に取り組み、ある程度の成果も出していた。共同研究をきっかけに、二人は「宗教及社会学研究室」を結成し、年長者である赤松智城が主任に就いた。宗教学者と社会学者が協力して結成したこの研究室は、両者の共通の関心である人類学（文化人類学を指す）を志向した。赤松は、京都帝大の卒業論文として宗教人類学の畑で呪術やマナに関する論文を書き、京城帝大に赴任する前にはフランスに留学してマルセル・モース（Marcel Mauss）から学んだ。秋葉は東京帝大の社会学科出身で、比較文化の観点に基づいて巫俗に関する人類学の卒業論文を出し、京城帝大に赴任する前にはイギリスとフランスに留学し、イギリスの人類学者と交流して、やはりフランスのマルセル・モースの下でしばらく授業を受けた経歴を持つ。

「すでに1934-36年に朝鮮人研究のために2000円を受け取ったことがある今村豊教授は、外務省文化事業部の助成金で「満蒙諸民族の体質人類学的研究」で1938年、1939年、1940年それぞれ2000円など、総6000円の研究費の新たな支援をもらった。日本の中国に対する本格的な侵略とともに、中国人に対する情報や知識が必要になり、短期間で集中的に大規模の研究費が支援されたのである」（召2008：201）。ここで注意すべきは、「満蒙諸民族」と「中国人」の区別である。今村らの研究対象は「中国人」ではなく、確かに「満蒙諸民族」であったが、当時の中国と満蒙の区別は厳密に言えば政治的なものであった。日本の帝国主義的な膨張初期における地理的な対象は、中国ではなく、満蒙がその始めであった。つまり、満洲国の存在を認識せねばならない。

我々は、文化人類学を主に扱っていた宗教及社会学研究室と、体質人類学研究を行っていた解剖学教室との関係について議論すべきである。もちろん、両者とも京城帝国大学の満蒙文化研究会に所属する同じ大学の教員であったとはいえ、研究課程における両者の共通分母はなかなか見当たらない。当時の体質人類学は今日のいわゆる「文化」概念を志向したわけでもなかったし、今村豊の教室は主に骨学を行ったため、シャーマニズムを研究していた赤松智城や秋葉隆との共通点は探り難い。唯一共通するのは、研究対象として設定された「満蒙諸民族」である。なお、両者は資料蒐集においてフィールドワークを行ったが、両者がともに遂行したことはほとんどなかった。

1932年末に発足した満蒙文化研究会は、1933年6月に発会式を行い、分野別の積極的な研究活動期に突入していった。研究資金は「対支文化事業」を主な業務としていた外務省文化事業部が担当した。つまり、城大が企画した満蒙文化研究会の事業は、一大学レベルではなく、帝国レベルの巨大なプロジェクトの一環であった。今村豊は、朝鮮族が密集していた「東北」地域をその対象として、宣撫も兼ねた巡回診療班を率いて3年

間、診療および資料蒐集に回った。彼が「東北」を離れ、少数民族が散在していた興安嶺の北満地域へ踏査に出向いたのは1935年の夏であった。今村が想定した「満蒙諸民族」は、満州や内モンゴル地域の満州族・モンゴル族のみならず、興安嶺の山間やアムール川流域の少数民族をも含んだものであったことが窺える。これに対し、「満蒙諸民族」の「宗教と民俗」を主な研究対象とした赤松や秋葉は、1935年9月の1ヵ月間、フィールドワークとして興安嶺の鄂倫春（日本の研究者は「オロチョン」と表記する）地域に出向いた。とりわけ秋葉はその1ヵ月の間、現地で寝食を共にしながら資料蒐集に臨む人類学的フィールドワークを実施した。1936年7月には宗教及社会学研究室の学生であった泉靖一が、一人で興安嶺博克図の山中に暮らすオロチョン族を対象に参考品の蒐集などの踏査を行った。以上のような事実にも拘わらず、「体質」「宗教及民俗」両調査の直接的な接点は見当たらない。

現在、両者の接点を再構成できる残存資料は、ソウル大学校博物館の収蔵庫に保管されている興安東省のオロチョン族や興安北省のヤクート族の遺物であるが、これらを蒐集したのは解剖学教室であった。今村を始めとする教室メンバーが、ヤクート族やオロチョン族から蒐集した参考品を、当時の民俗参考品室を担当していた秋葉に寄贈したものである。人骨を蒐集して「体質」を研究する人たちが、「宗教及民俗」を研究する人たちの参考品を蒐集して寄贈したことになるが、このようなことは、両者が緊密な関係にない限り、そう簡単に生ずることではない。なぜなら、彼らが踏査した地域は、対ソ軍事作戦が行われ、関東軍の従属部隊や特務機関によって厳格に統制される衛戍地域であり、一般人は容易く出入りできず、移動には常に保護という名目の監視がつきまどっていたからである。さらに、当時の交通手段を考えると、長距離を移動する間の交通の手配や、自ら直接管理しなければならない資料貨物なども、相当な悩みの種であったはずである。とりわけ1937年7月に日中戦争が勃発したことを考えると、蒐集期間が1937年7月や8月であったのは特記すべきことである。これらの蒐集作業は相当に緊迫した状況下で行われたのである。いかなる理由であるかははっきりしないが、今村らはいかなる試練に甘んじても、自身の研究に必要な「体質」資料以外に、「宗教及民俗」関連資料も蒐集して参考品室に寄贈したのである。



写真 8、9 京城帝大医学部解剖学教室が蒐集した鹿角製笛

ヤクート族の参考品で、鹿を呼ぶのに使う。蒐集日は1937年7月。蒐集地は興安北省。



写真 10、11、12、13 京城帝大医学部解剖学教室が蒐集したオロチョン族の参考品

符籍用の神体3種。11、12、13は10の一部をそれぞれ拡大したものである。蒐集日は1937年8月。蒐集地は興安東省の巴彥旗甘河ウルブラ。

満蒙文化研究会は、研究チームの研究成果を「パンフレット」と「報告」の2つの形式で出版し、1938-1942年の間に全7冊を発行した。このうち、「報告」第4冊に「蒙古族及び通古斯族の体質人類学的研究補遺」（今村・島 1938）、「パンフレット」第3冊に「満蒙民族の体質」（今村 1939）が収められていることから分かるように、今村の解剖学教室は「満蒙諸民族」の体質人類学研究で相当な進展をみせていた。これは、当時の世界の他のどの組織も成し遂げえなかった、最先端の業績であったと評価しても差し支えない。もちろん、このような作業の意図が帝国主義的な膨張と支配、そして戦争遂行過程に動員させるための下拵え的な作業であったことについては改めて議論すべきであろう。

日中戦争が勃発すると、京城帝国大学は1938年6月4日に満蒙文化研究会を大陸文化研究会へと拡大改組した。その第一の実践として、学術調査隊を6月から8月までの3ヵ月間、蒙疆地域に派遣した。朝鮮総督府および朝鮮軍司令部の全面的支援、蒙疆地域の関東軍の惜しみない協力を得るほどの巨大な作業であった。「軍旗が赴く所、学旗も共にする」（尾高朝雄）という、いわゆる「京城帝国大学蒙疆学術調査隊」の第一次学術調査であった。

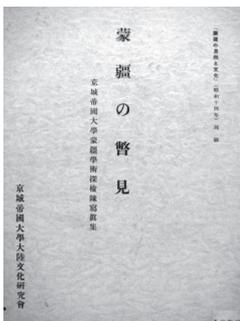


写真 14 『蒙疆の瞥見』（写真集）表紙  
（京城帝国大学大陸文化研究会、1939.6.14）



写真 15 「学旗」と「テミン老の娘「白い花」（右）と「金の花」（1938.7.31 内蒙古で撮影）



写真 16 鈴木誠先生宅に保管されていた「学旗」京城卒業生の横溝先生の住まいで高杉志緒教授とともに拝見している（2011.4.9 小倉にて）

73年が経ち、照合できた同じ「学旗」の2枚の写真が現在の我々に伝えるのは、まず、記録と記憶のパズルをつなぎ合わせて過去の事実を正しく整理することである。過去の行跡が孕むイデオロギー的な問題は、事実を細かく、また正しく整理した上で検討すべき事柄である。事実をありのままに整理していくうちに、多くの問題は解決の道筋を辿るだろう。さもなければ、いわゆる「カルチュラル・スタディーズ」が横行する隙を与えてしまうだろう。そうなると、事実よりも言説の空間が広がってしまう。言説が無効なわけではない。ただ、事実よりも言説の比重が大きくなることは問題であると思う。言説の比重が大きくなればなるほど、その内容に事実とは程遠い嘘を含んでしまう可能性も高まるからである。私は73年前の写真に登場する2人の少女（当時10代半ば）に会い、写真と旗を見せたい。そして当時写真を撮った人たちがどんな行動をとり、どんな話をしたのかについて、詳細に聞きたい。



写真17 『城大学報』30号  
(1939年10月1日付)

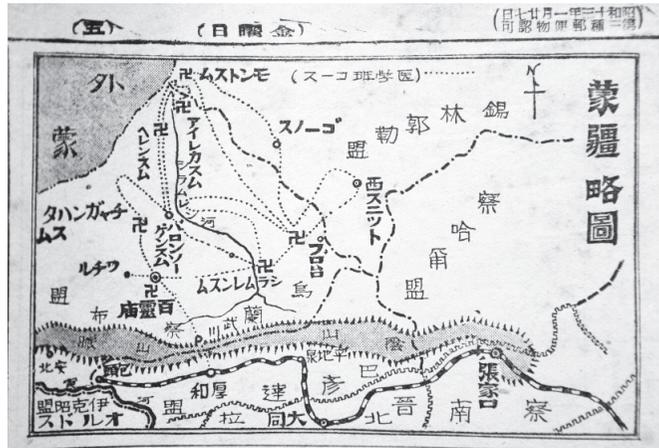


写真18 蒙疆略図

第1回蒙疆学術調査隊の先発隊に進み出たのが泉靖一であった。彼はその年の3月に濟州島に関する社会人類学の論文を作成して城大法文学部を卒業した後、赤松と秋葉の研究室の助手を担当していた。彼は学術調査隊の民族分野を任されたのみならず、本部隊の総務役も遂行するなど、その優れた組織力を買われていた。城大の国際法講座担当の泉哲教授の長男である彼は、予科時代から山岳班に所属して登山隊を率い、さらに大学新聞『城大学報』の編集も担当するなど、根っからの「城大マン」であった。登山というものは一人でできるものではない。常に組織で働く。山岳班の班長を務めたことがある彼は、組織を管理することにおいて優れた力量を発揮したのである。多彩な能力を持つ人々を一つのチームにまとめ上げることで山岳活動が可能になることを考えると、京城帝国大学の大陸文化研究会における学術調査隊、つまり総合学術チームの総務の座に着いた泉靖一は、それまで脆弱な関係にあった「体質」と「宗教及民俗」を強力に繋げるパイプあるいは接着剤の役割を担ったと思われる。

満蒙文化研究会を拡大改組し、大陸文化研究会に改称したのは他の理由もあった。

1938年5月、満洲国の首都新京に開校した建国大学の存在がそれであった。学術調査というジャンルにおける地域分担の試みの結果、城大はその対象地域を蒙疆に移したと理解できる。つまり、満洲国内の満蒙は建国大学に任せ、京城帝国大学は新たに開拓された蒙疆に進出するという役割分担の一環であった。

蒙疆とは、蒙漢回3民族によって構成される支那西北四省（寧河、甘肅、青海、新疆）にあたる回教圏の地域である。西を望む回教民族、北に及ぼんとする蒙古民族、京包沿線に伝統の力を有する漢民族の三者が合流する場所が蒙疆である。蒙疆の総人口は600万人で、蒙古人30万、回民10万、残りは漢民族である。西スニット旗の王公德王が1934年初に百靈廟で蒙古復興運動を起こすと、蒙古聯盟、察南、晋北の3ヵ所の連絡主体として蒙疆聯合委員会が結成された。1939年9月1日には、蒙古聯合自治政府の成立が宣言された。張家口にある蒙疆学院は社会学者である副院長の田邊壽利教授が主導していた（鈴木昇 1939）。

大陸文化研究会は蒙疆に学生大陸学術調査団13名を派遣した。心理学専攻の天野利武教授を団長に、1939年7月18日に京城を出発して9月5日に帰城した。法文班5名と医学班7名で学生を組み、主に蒙疆東部一帯の張家口、包頭、厚和を訪ねた。法文班は当地域の回教徒に主眼を置き、医学班は蒙古人に関する医学的調査を行った。城大卒業生が蒙疆方面に進出し易くするための広報も行い、張家口の朝鮮総督府出張所、晋北自治政府、蒙古聯合自治政府、善隣協会、官立厚和医院、北京朝鮮総督府出張所などの助力を得た（天野 1939）。

城大は大陸文化研究会を基盤に、第1回大陸文化講座（1939.9.9-11.8）を開催した。全24名の教授が講演し、講演の原稿は、大陸文化研究会編『大陸文化研究』（岩波書店、1940.7、全546頁）として刊行された。その第1回で、体質人類学の今村豊は「北アジア人種概論」、文化人類学の秋葉隆は「北アジアの民俗」を担当した。つまり「体質」と「文化」が「北アジア」という地域を背景に接近していく傾向が見られる。第2回大陸文化講座（1941.5.5-6.18）も開催され、その成果も大陸文化研究会編『続大陸文化研究』（岩波書店、1943）に編まれた。尾高朝雄（法文学部法理学講座教授）は「大東亜共栄圏の文化理念」、島五郎（解剖学教室助教授）は「東南亜細亜の人種相一泰人を中心に」というタイトルで講演を行った。島五郎（1906-1977）は今村豊の最初の弟子であり、解剖学第三講座の助教授を務めていた。

今村と島を中心とする城大解剖学教室の研究成果は、他の研究者たちの基礎資料としての役割を担った。興安東地区警備軍司令部の陸軍軍医将校は達斡爾族、索倫族、鄂倫春族に関する体質人類学的な研究論文を発表しながら、京城帝国大学の今村や島の研究結果を参照したと述べている（木下 1939）。「在満諸民族の指紋に関する研究」の著者で、陸軍軍医学校出身の哈爾濱医大の教授は今村と島の助けがあったと語り、二人はオロチョン族に関する医学的研究の先駆者であると称えた（山本 1940）。朝鮮から出発し、満蒙を経て蒙疆やタイの資料までをも包摂するなど、名実共に大陸を網羅する今村の体質人類学的な人骨研究は、時間が経つにつれ、弟子たちによって深化・拡張される傾向を見せた。島に続いて鈴木誠（1914-1972）が中心的な役割を担い始めると、彼らの作業は日本人類学会でその地位を認められるようになった（大西・鈴木 1941、鈴木誠 1943）。

つまり、今村から始まった城大の体質人類学は、島や鈴木に受け継がれる確固たる研究ラインを形成したのみならず、アジア大陸を対象とするその研究業績もが認められたわけである。

満蒙文化研究会から大陸文化研究会へと、今村の踏査は絶えず続いた。日本人類学会の会員でもあった今村は、1935年夏の1ヵ月間、体質人類学調査のために満洲族、索倫族、達呼爾族、額魯特族、顎倫春族、錫伯族などを訪問し、1941年夏の1ヵ月間は吉林の満洲旗人の部落調査、1942年8月には満洲国間島省安図県地方の現地調査、1943年夏には黒河下流のタホ・ルと満洲人に関する調査、1944年夏には城大の法文理工の同僚を含む20余名の調査隊長として蒙疆包頭に、黄河を渡ってオルドス地域にも入った。そこで彼は漢蒙接触地帯で生まれた漢人に対する調査も行った。このような踏査には必ず教室の弟子たちも同行して資料を蒐集し、論文を作成・発表した。彼の指導の下で書かれた、赫哲族に関する珍しい論文も伝わっている（堀井・正木・宮本1942、鈴木・平野1942）。時が経つにつれ、彼の名声は満洲地域に広く伝わっていった。1943年初頭に発足した満洲民族学会の会員名簿（満洲民族学会1943）や座談会・講演会なども、彼の名声を広めるのに一役買った。このような広がりによって今村は、一般の人々にも「東シベリアの体質人類学」を研究する学者として認識されるようになった（『大阪朝日新聞（南鮮版）』1941年8月26日付）。

京城帝大の満蒙研究は、軍隊とは切っても切れない関係を持っていた。関東軍が支配する北満に出向く時には、軍隊の統制や保護を受けないと動けなかった。研究者にとってはそれが毒にも薬にもなったが、その果ては軍属人類学に帰結してしまう有り様であった（全2010）。満蒙研究会の最初の課題のために満蒙を訪問した際、今村は興安警備軍や南警備軍の主隊と支隊の各所で資料を蒐集できたため、その報告書には「日満軍部の皆様の好意で計測に多大な便宜を得た。……児玉中将、梶井少将、松室大佐、寺田、河崎、下永三中佐、泉少佐、原田、嘉悦、藤巻軍医正、その他の皆様に感謝の言葉を贈りたい」（今村1934：726）と記している。ここに登場する松室（孝郎）大佐や泉（鉄翁）少佐は特務機関長であった。城大医学部長を担当していた今村は、衛生施設調査の傍ら、城大出身の軍医部隊の慰問のために1940年2月28日から3月24日までの1ヵ月の間、北京－石家荘－太原－山西－下福のルートで北支を訪問している（『京城日報』1940年3月26日付）。

一つ興味深いのは、法文学部出身で社会人類学を専攻した泉靖一と、医学部出身で体質人類学を専攻した鈴木誠が無二の親友であったことである。もちろん二人の親友関係は、大学の同級生で蒙疆学術探検隊の同志という人脈から形成されたものである。結果的に京城学派人類学は、満蒙文化研究会という城大の研究組織をベースに出発し、個人的な人間関係によって成立したことは否定できない。このような「コネ」は、後日さらに緊密かつ敦厚に続くのであった。

### 3 決戦態勢と資源調査

日中戦争以降、戦線が「南支」へ拡大すると、帝国日本は皇紀 2600 年を起点に総力戦体制に突入した。兵力不足を埋めるため、台湾総督府や朝鮮総督府は各々の植民地に向かって皇民化政策を画策した。1941 年 12 月 8 日の大東亜戦争の勃発とともに、植民地の青年が戦線に送り込まれる状況に至った。その頃、京城帝国大学の代表的な思想善導教授であった尾高朝雄は、新聞や雑誌に夥しい宣伝用記事を吐き出した。学生や青年に向けた「皇民としての覚悟で軍服を着て戦場へ」（尾高 1941）といった扇動とともに、「内鮮一体の大理想は皇民としての練成」（尾高 1942.2.11）であり、「まず皇国臣民になることが唯一の「内鮮一体」具現の道」（尾高 1942.2.12）であると主張した。「皇民化」と「内鮮一体論」を掲げる彼の扇動や主張は、1944 年の朝鮮人徴兵制実施を控えた理論的な整備の次元（尾高 1942.5.19）であったことは確かである。

戦闘兵力としての人的資源が切実な決戦体制を前に、大学は兵営化し、教授たちは決戦体制に動員されるようになった。医学部長を歴任した今村豊もその例外ではなかった。彼らの作業が、総動員令に従う軍事作戦の一環であったことは疑いもない。したがって現在、このような問題を議論する我々は、学問的な貞操の確立とは別次元で問題を設定し、当時の作業に対する評価を行わなければならないと思う。

「皇紀 2602 年」（1942 年）という文字の上で半透明の頭蓋骨と猫の顔が重なる『京城医学』（*Medizinische Akademie zu Keijo*）の表紙（写真 19）は、当時の京城帝国大学医学部の雰囲気を反映したものに違いない。二重に隠された顔の頭蓋骨が象徴するのは、何ともエキゾチックともシニカルともいえるだろうか。すべての状況がごちゃ混ぜになった叫びであったのだろうか。戦死した学友の消息がキャンパスに伝わり、赤紙の令状を受け取った学友の出征を控えた壮行会があちこちで行われていた城大は、まさに戦争の渦中にあった。学徒たちの徴集によって講義を正常に進行することが困難になると、キャンパスのグラウンドは食糧目当ての野菜栽培の農場と化した。総力戦では戦争物資の供給が優先されるため、生活必需品は配給制で運営された。銃後（home front）の状況とは異なり、戦線では戦争遂行のための資源、つまり物的・人的資源の需給を調整することが大きな課題となっていた。

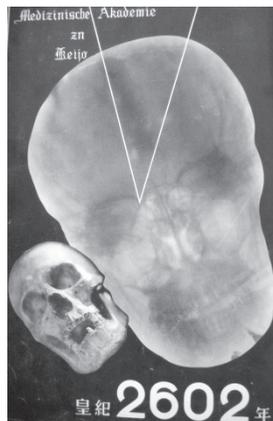


写真 19 皇紀 2602 年の骸骨  
（『京城医学』表紙）

1943年1月に挙国的規模での海軍資源調査隊が結成され、パラオを経てニューギニアのマノクワリに派遣された。当時、南方戦線を憂慮した大本営は、満洲の関東軍を南方戦線に再配置したが、その過程で徴発した貨物船は、西部太平洋に出現した米軍潜水艦の主な攻撃対象となった。調査隊がマノクワリに到着した3月には、戦争は既に取り返しのつかない程に敗色が濃くなっていた。日本軍の玉砕は1942年12月8日のニューギニアのバサブアから始まり、1943年1月2日にはニューギニアのブナ、1943年5月12日～6月29日にはアリューシャン列島のアッツ島とキスカ島へと続いた。米軍の攻撃によって焦土と化していたニューギニアの東部戦線に、ニューギニア資源調査隊の一員として京城帝大医学部の医療班5名と民俗学専攻者が派遣された。調査隊長の田山利三郎は、京城から派遣されたグループを「京城組」(座談会1944:57)と名付けた。戦争遂行のために資源=石油が供給できる油田、もしくは油を搾りだせる炭鉱を発見するのが彼らの最大の任務であった。「海軍省ニューギニア民政府の中に、「調査局」と、その下部組織としての「ニューギニア調査隊」が編成され、調査隊長は田山利三郎先生、彼は当時、海軍嘱託で海上保安庁水路部測量課長を兼務した東北大学教授であり、調査船の第五海洋丸を指揮していました。その補佐役として、京城帝大の、当時学生主事補の民俗学者泉靖一氏が任命されました。隊の構成も、諸科学連盟当時の夢よりも飛躍的に大きくなり、第一から第八までの八つの班<sup>2</sup>であり、「人的資源に対する観察科学である民族学」(中野1942:309)は必然的に動員されたのであった。

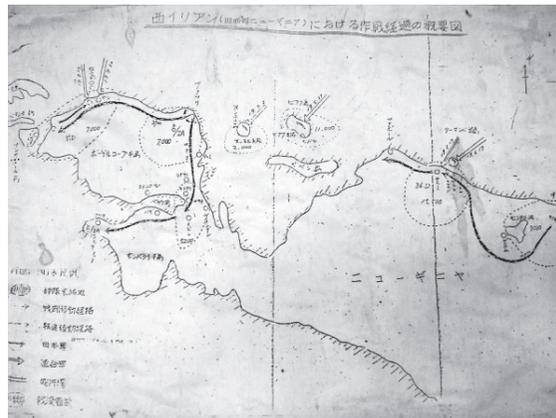


写真 20 西イリアンにおける作戦経過の概要図

Museum Perang Dunia KEII 1942-1944 に展示されている地図 (筆者撮影、2009)

「海軍資源調査隊」は帝国日本の全国各地からの参加者170名による9ヵ月間にも及ぶ大規模な調査団であり、様々な分野の専門家たちを糾合したため、効率的な作業を期待するのは難しかった。彼らが西イリアンの現地で実際に作業できた時期は約6ヵ月しかなく、円滑な統率のためにいくつかの班に分かれて活動した。さらに、「現在南方特に

<sup>2</sup> 第6回外邦国研究会(2004.11.27、日本地図センター)における佐藤久先生の講演の記録。講演のタイトルは「地図と空中写真、見聞談:敗戦時とその後」。

ニューギニア方面に作戦中の部隊は徹底的現地自活を」(竹田 1943 : 322) せよとの命令があったため、自活をしながら何とか調査を進めた。「第一回の調査……第二班……調査地は舊蘭領ニューギニアの首都マノクワリのすぐ近くにあるプラフイ河であった。班の構成は調査員、助手、連絡員、通譯、警戒兵を含めて邦人総数十九名、それにパラオ島から連れて行つたカナカ族九名、インドネシア人の巡査五名、パプア百四名が加はり総勢百五十名に垂れんとする多人数であつて、……カナカ族の九名は専ら測量班の雑役に、インドネシア人の巡警はパプアの苦力監督として、パプアは荷物輸送の苦力として使用した。……カナカ族の如きは九名のうち六名迄が癩病し、そのうち一名が死亡するといふ状態であつた。パプアに至つては百四名中常時輸送に使用出来るものは約七割にすぎず……」(田中 1944)。熱帯の疾病とも戦いながら、異なる民族を糾合して労働力を構成したために、その統率自体が易からぬ問題であつた。そのような状況においても「京城組」は特別扱いされ、特別に東側に離れているビアク (Biak) 島に踏査に出向いた。そこで体質人類学者の鈴木誠や社会人類学者の泉靖一と一緒に活動する姿は関心を惹く。彼らは海軍南方政務部所属の「囑託」という身分で参加していた。

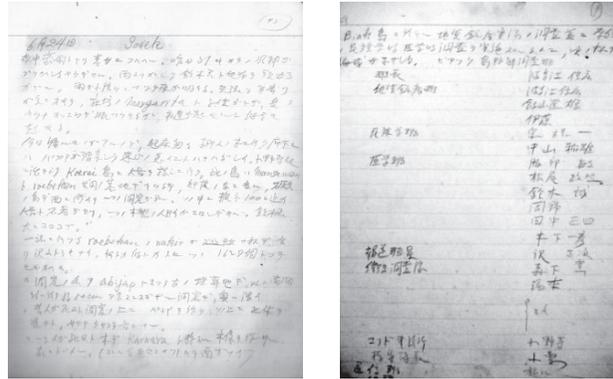


写真 21、22 泉靖一のフィールドノートと日記の一部

「Biak 島に於ける地質鑛産資料の調査並に原住民の民族学的医学的調査を実施するために、次の様な編成が示される。ビアク島特別調査班：班長 (波多江信広)、地質鑛産班 (波多江信広、飯山達雄、伊藤)、民族学班 (泉靖一、中山稻雄)、医学班 (服部敏、松尾政照、鈴木誠、岡野、田中正四、木下一彦)、報道班員 (沢正次)、衛生調査隊 (森下薫、湯本他 3 名)、コリド事務所 (小野寺)、指導係長 (小林)、通信班 (樋口)」(泉靖一のフィールドノートから)。この中で、波多江信広は朝鮮総督府の技師、飯山達雄は朝鮮総督府鉄道局広報課の職員で泉靖一とは長年の知己であり、写真専門家であつた。中山稻雄は泉の助手を務めた海軍側の人間であつた。「コリド事務所 (小野寺)」と書かれているのが興味深いが、コリド (Korido) はビアク島の北側にほぼ繋がっているスピオリ島の南部中心地にある小さな町で、当時、日本軍の一部がそこに駐屯していた。小野寺とはその部隊の部隊長であつたことが筆者の踏査 (2009 年) で確認できた。コリドの老人二人<sup>3</sup>

<sup>3</sup> Domi Korwa (76 歳) と Elia Rumasew (79 歳)。当時、日本軍は戦場に必要なる労働力を「労務者」という名称で現地から雇い入れた。11 歳から 14 歳ぐらいの少年たちも動員されたという。

は、自分たちは「ロウムシャ」（労務者）の役割を果たしたと証言し、「オノデラ」の名前をはっきり記憶していた。小野寺は戦後に2度、コリドを訪問しているとも語った。組織の名人として有名であった泉靖一は、現地の駐屯軍の部隊長までも「特別調査班」に編成したことが分かる。そこには第三班と一緒に配属されていた小林、樋口、中山も含まれた。



写真23 Alfoei という名の「人骨島」  
(泉靖一のフィールドノートより)

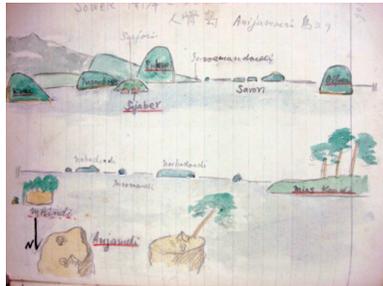


写真24 Sowek 沖の「人骨島」分布  
右上に Alfoei 島が表示されている  
(泉靖一のフィールドノートより)



写真25 ピアク島にあるサンズンディという名の「人骨島」  
(2009年、筆者撮影)

「6月24日 Sowek / 夜中豪雨トナリ寒サニフルヘル。昨日ヒキカケノ風邪ガブリカヘシタヤウデア。雨モリガシテ鈴木君ト毛布ヲ頭カラカブル。雨ガ小降りニナツテ夜ガ明ケタ。矢張り年寄りガ先ニオキテ、寝坊ノ Margarita ト子供ダケガ叟？ノヤウナカッコウデ眠ッテキタガ、私達ガ起キルト彼等モ起キル。 / 今日帰ルモノガアルノデ、起床匆々支那人ノ紅片ヲ。廊下ニハパプアが蝟集シテ感ジノ悪イコトハナハダシイ。小野寺氏ニ話ヲシテ Koerei 島ニ人骨ヲ探シニ行ク。此ノ島ハ Mansawan ト roebekan 共同ノ墓地デモツ？タテ、部落ノ東ニ当ル。硬岩ノ島デ西ニ向イテツノ洞窟ガアル。ソノ中ニ概ネ 100 ニ近イ人骨ト石器ガアリ、一ツノ木製ノ人形ガコロンデキル。鈴木君大ニヨロコブ。 / 一緒ニイッタ roebekan ノ wakir ガゴウヨクナ奴デ、余リ沢山トラセナイ。何トカ彼トカイヒツツ 16 ~ 7 個トツテヒキカヘス。 / 洞窟ノ名ヲ abijap ト云ツテ古ノ埋葬地デ、ソレハ満潮時ニオイテ約 50cm ヲ余スにスギザル洞窟デ、奥ハ深イ。 / 昔人ガ死ヌト洞窟ノ上ニパライヲ作り、ソノ上ニ死体ヲ置クト、ヤガテクサツテ骨ニナル。 / 一家人ガ死ヌト木デ Karwara ト称スル木像ヲツクリ、家ニトドメル。(コレハ鈴木君にヤツテキテ図ガナイ)」(泉靖一のニューギニア日記の一部から。下線は泉)。

Sowek とコリドの間は細長い湾で、コリドから Sowek に行くには必ず船に乗らなければならない。Sowek の外側にはチェンドラワシ海（泉の訪問当時は Geelvink 海）が広がる。Sowek 沖には珊瑚島が並び立っている。そのうち、小さな無人島は共同墓地として用いられていたが、泉靖一は共同墓地がある島を「人骨島」と記した。一帯の地形は基本的に珊瑚礁の石灰岩地帯であるため、海辺には海蝕洞窟が多く形成され、これらの洞窟が住民の共同墓地として利用されていたのである。日記に登場する「鈴木」は解剖学教室の鈴

木誠で、「小野寺氏」は上記の部隊長であった。コリドには日本軍が約2年半駐屯し<sup>4</sup>、少年から老人に至るまで、住民の労働力を利用した。労働の報酬は日給として支給されたという。聞き取りを行った老人たちは筆者の前で、当時覚えた日本軍歌を高らかに歌ってみせた。

「小野寺氏ニ話ヲシテ Koerei 島ニ人骨ヲ探シニ行ク。此ノ島ハ Mansawan ト roebekan 共同ノ墓地デモツ？タテ、部落ノ東ニ当ル。硬岩ノ島デ西ニ向イテツノ洞窟ガアル。ソノ中ニ概ネ 100 ニ近い人骨ト石器ガアリ、一ツノ木製ノ人形ガコロンデキル。鈴木君大ニヨロコブ。／＼一緒ニイッタ roebekan ノ wakir ガゴウヨクナ奴デ、余リ沢山トラセナイ。何トカ彼トカイヒツツ 16～7 個トツテヒキカヘス」(下線は泉)。泉が小野寺氏と話をしたというのは、彼の助けを得て船を借り、Sowek 付近の小さな無人島＝「人骨島」を訪問したというものである。この地域には今も Mansawan 家と Roebekan 家が存在する。Koerei 島は泉のフィールドノートのスケッチにもその地名が出てくる。木製の人形を、ここではカルワル (Karwara) と呼ぶ。人が死ぬと、洞窟の中に棚を作って死体を安置し、家には亡者の代わりに木像を置いておくが、これを造る儀礼専門家は別にいる。この木像を、死体が置かれた洞窟の中に置く場合もある。祖先崇拜の慣習の一種とみられるが、亡者の霊がカルワルに宿するという信仰があり、祖先が子孫を保護してくれるとの意味も持つ。したがって、骸骨が見つかる共同墓地の洞窟には、木製のカルワルも当然ある。体質人類学を専門とする鈴木は、このような光景をみて喜んだはずである。彼らは、人骨とカルワルを蒐集するため、共同墓地を共に訪問した Roebekan 家の「wakir」<sup>5</sup> (代表) に取引を持ちかけたに違いない。「代表」が要求する金額を十分に支払えなかったため、彼らは 16-17 個の骸骨しか蒐集できなかった。「代表」の態度を、泉は「ゴウヨク」と表現したのである。体質人類学者は人骨を蒐集し、社会人類学者は木製のカルワルを蒐集した。二人の人類学者は、戦場となっていた西北部ニューギニアのビアク島のある離島で、人類学の現地研究を遂行する経験を共有した。京城学派人類学の芽は、このようにして育ったのであった。

<sup>4</sup> 戦時中、ビアク島の南方にあるビアク石灰岩洞窟に本隊が駐屯し、一部は北方面に沿ったコレム河畔に駐屯した。コレム河駐屯軍の部隊長は千田貞敏海軍少将で、コリドの小野寺の部隊は、コレム河駐屯軍の配下にあった小規模の海軍陸戦隊の一部であった。ビアクの本隊は、1944年5月27日に攻撃を開始したアメリカ軍によって 11,000 名が全滅した (6月22日)。太平洋戦争当時、ニューギニアからフィリピンのレイテ島へ北上して進撃するアメリカ軍を遮るための要地であったビアク島での戦闘は、最も過酷な玉砕作戦であった。関連資料は、ビアク洞窟の隣に設けられた Museum Perang Dunia KEII 1942-1944 という博物館に展示されている。

<sup>5</sup> 「wakir」という表記は「wakil」の誤字のようである。インドネシア語で「wakil」は「副」を意味する。「wakil」の言葉自体に「誰かに代わるもの」という意味が含まれているので、国会議員や地方議会議員は「国民に代わる人」として「wakil rakyat」と称され、副大統領も大統領に代わる人という意味から「wakil presiden」と呼ぶ。他にも、副郡守は「wakil bupati」、副県令は「wakil camat」となる。ちなみに、ある事案のために一つの集団の意思を代表する地位を指して称する場合もある。例えば、都市撤去民を「代表する」場合において「wakil」を用いる。即ち、ここで用いられた「wakil」の意味は「代表」と考えられる (スズキ博士の教示による)。



写真 26 泉靖一が蒐集したピアクのカルワル  
(ソウル大学校博物館所蔵、  
宣逸撮影)



写真 27 京城帝大陳列館入口の階段で、泉が蒐集したニューギニア参考品の隣に座る秋葉隆  
(1943 年晩秋の午後に撮影)

泉靖一は調査当時、自分のフィールドノートや日記帳に水彩スケッチを描いていた。鈴木誠は帰還後、一般大衆雑誌に紀行文の形式で当時の調査について寄稿したが、その紀行文にも、鈴木氏の巧みなスケッチが掲載されている(写真 28 参照)。戦争当時、戦場に派遣された学者には写真撮影用のフィルムなど供給できない状況にあったため、彼らは写真の代わりに絵を描いて土俗誌 (ethnography) を作成しようとしたのである。1943 年秋に彼らが帰還した後、京城帝大の大学新聞『城大学報』は次のような記事を掲載した。「〈ニューギニア資源調査学術探険隊〉、泉靖一 (学生課)、服部敏 (整形外科)、鈴木誠 (解剖)、小林宏志 (法医)、田中正四 (衛生) 5 名」という名前と共に、「鈴木氏はパプア人の人骨六十五体を、民俗班の泉氏は千点を超ゆる原住民使用の土俗品を持ち歸つた。……鐵道局の飯山達雄氏も一緒と思はれ、寫眞技術に秀れた同氏は多数の優秀なる現地寫眞を持ち歸り……」、「泉靖一氏は民俗学上の現住民土俗参考資料一千点を越ゆる御土産を持ち來つた、先に本学においては民俗陳列館が出來日本有数の蒐集を誇つていたが……」(『城大学報』74、1943 年 10 月 1 日付)。一緒に参加した田中は、「原住民の民族学的な部門は民俗を専門にやつている泉が書くはずであるし、人類学的な記述はその道の専門家の鈴木がいるので……」(田中 1944) と、泉や鈴木の人類学的成果を評価した。鈴木が持ち歸つた 65 体の人骨は、現在その行方が分からない状態である。泉が蒐集したという土俗品の一部だけがソウル大学校博物館に保管されているが、これらは戦時の 1943 年に半年以上にわたりニューギニアで行つた二人の人類学者の業績を物語っているようである。

彼らは海軍資源調査隊の一員として参加したため、当局に規定の報告書を提出していた。「海軍」用紙に縦書きでタイプされた 28 頁の「ピアク島特別調査班民族班中間報告スハウテン群島原住民ノ生活ト宗教」(調査員泉靖一、助手中山稻雄) 報告書は、現在、東京大学文学部図書館に残されている。泉は、この報告書を作成する前に、「ヤムール地峽並へールピンク湾南部ニ於ケル原住民ノ生活狀況」という報告書を作成して提出したこと

を、上記報告書の凡例に明記している。このような報告書についての綿密な比較検討は、当時の状況を整理するのに役立つと思う。確かなことは、彼らが遂行したのはあくまでも資源調査であったことである。その傍らで、人類学者であった鈴木誠や泉靖一が自分たちの専門分野を活かそうと努力したのは評価すべきであろう。彼らが蒐集した（体質と文化を併せた）人類学的資料は学問的成果の一部として評価することもできるが、蒐集品が獲得される過程において介入した戦争や占領の問題に対しては、再考が必要である。つまり、それら蒐集品は、鹵獲された戦争捕虜の一種と見るのが正しいのである。



写真 28 鈴木誠の紀行文「ニューギニア点描」

(『週刊朝日』1943年12月19日付)



写真 29 「共同研究に重点 城大の決戦体制全し」

(『京城日報』1944年4月15日付)

城大が設けた決戦体制の共同研究は、主に法文学部所属の教授らが中心になって作成したもので、その内容は次の通りである (『京城日報』1944年4月15日付)。

1. 宣伝方策 (戸澤教授)、2. 戒厳令適用上の諸問題 (鵜飼教授)、3. 労務供給源としての朝鮮人口の調査 (四方教授)、4. 京城に於ける人口疎開方策 (四方教授)、5. 朝鮮生活必需物資需給機関確立の具体的方案 (鈴木教授)、6. 町会愛国班機構整備方策 (松岡教授)、7. 半島人皇民化促進の具体的方策 (長谷川教授)、8. 朝鮮に於ける食糧増産上より見たる部落啓蒙団体の分析 (大内教授)、9. 日本上代稲神の研究 (敬神=松月教授、道教思想=宮島助教授、神話に関する研究=秋原助教授)、10. 国史教育徹底の方策 (松本教授)、11. 朝鮮に於ける家族制度 (秋葉教授)、12. 半島人の労務素質の研究 (天野教授)、13. 朝鮮に於ける団体適応方策 (松本教授)、14. 現時局下に於ける朝鮮思想動向 (藤田教授)、15. 朝鮮に於ける皇民練成問題 (松月教授)、16. 皇民史観に基くアジア史の検討 (鳥山教授、松田助教授)。

上記の研究タイトルが一つの研究班に当たる。一つの研究班には1-10 数人の教授や助教授が班員として参加し、主任者に協力していた。たとえば、12 番の天野が主任の研究では、末松教授が「半島に於ける勤労観の史的考察」、小島教授が「半島人の人生観と勤労思想」、秋葉教授が「半島人の家の観念と勤労精神」、鈴木教授が「半島に於ける労務の慣行的集団組織」と「半島に於ける女子勤労観の最近動向」、和田講師は「半島労務者の特殊性能」などのテーマで研究を行い、研究発表や論文集を制作する準備に入っていた。以上の計画がどの程度施行され、いかなる成果を出したかについて詳しくは分からない。ただ、計画を見る限り、京城帝国大学の教授陣は、学問を投げ出した集団であったと想定せざるを得ない。それらは戦争遂行中の軍事作戦班が遂行する業務と区別が付かないほどの内容であった。当時の大学という存在は、自ら進んで軍属であることを自任しなければならない立場にあったことは十分に分かる。

戦争期間中、「決戦体制」（今村 1943.5.30）および「決戦」（今村 1943.12.7）は、支配者と知識人たちがもっとも頻繁に用いたキーワードであった。もちろん、これは当時のシステムによる結果であり、一個人の問題でなかったことは周知すべきである。朝鮮総督府傘下の総力連盟宣伝文化委員および朝鮮体育振興会に理事（匿名 1943：10）として参与した今村は、職分に応じた内容の文章を新聞に掲載した。たとえば「女性服装問題」（今村 1943.2.9）を取り上げ、「戦時下もんぺ奨励策」（今村 1943.2.10）を擁護した。また総督府警務局傘下に組織された厚生協会第五委員会委員長の職分で、「決戦体制下、人口問題は、重要なるものの中、最も重要なるものに属し、緊急たると同時に永久に、国家の大問題である」（今村 1943.6.20）と主張もした。決戦体制の直前に「学者待遇を要求」していた今村の声（『京城日報』1940年1月8日付）は、遠い神話になってしまった。

城大の第三次蒙疆学術調査は、1944年8月1日に壮途に着いた。この調査隊は蒙疆自治政府が誕生した1938年に、半島や蒙疆間の経済的な紐帯を強固にするための第一次調査を始めて以来、1939年には第二次調査隊が派遣され、今回は決戦に備えての派遣であった。陣容は今村隊長以下、物的資源調査班や人的資源調査班で編成され、調査の範囲も科学と文化の総合的なものであった。行動区域としては、物的資源調査班のうち、地質稀元素両班はバインボグド、固陽を繋ぐ線、鉱山班は大青山、ウーラ山の00調査、土木班は包頭周辺の黄河灌漑調査、薬草班は大樹湾、昭君墓百霊廟附近の調査、人的資源班は百霊廟大樹湾昭君墓附近の調査であった（『朝鮮』351号、1944年8月1日、50頁）。



写真 30 百靈廟大樹湾で発掘中の城大の第三次蒙疆学術調査隊の人的資源調査班

鈴木（正面中央）、今村（中央右で背を向けている人物）、相馬（右端で斜めに背を向けている人物）（相馬 1995：10）。



写真 31 今村豊（右）と相馬（相馬光明提供）

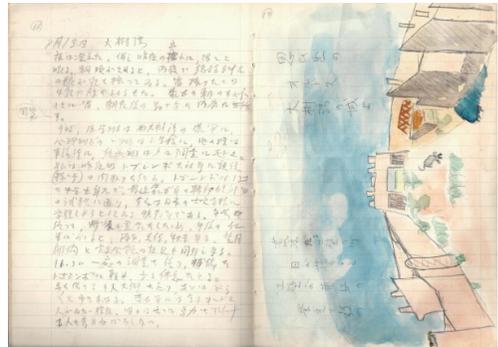
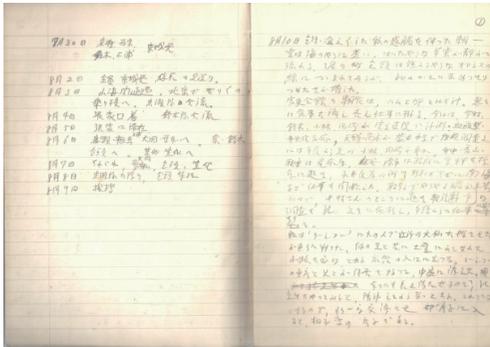


写真 32、33 泉のフィールドノートより

7月30日 岩瀬、石原、鈴木、三浦 京城発／8月2日 全員京城発。総長の見送り／8月3日 山海関通過。北京で乗り換へ。岩瀬隊合流／8月4日 張家口着。鈴木隊合流／8月5日 張家口滞在／8月6日 岩瀬、相馬、三浦 大同厚和へ。泉、鈴木 包頭へ。其他 宣化へ／8月7日 それぞれ大同、包頭、宣化／8月8日 岩瀬隊を除き、包頭集結。（左）

8月10日 包頭……泥の町 包頭は燃えるやうなオアシスの線につつまれている……官吏会館の朝食は、ハムと卵とみそ汁。食事を終え 各人仕事に掛る。今日は、今村、鈴木、小林、田崎は官立医院で計測、血液型、井出化反応、天野、高本は蒙古中学で性格調査したが、午後には小林、田崎が参加。竹中、香山、坂本は龍泉寺へ、麻谷、源平は政府に資料蒐集に赴き、永井氏等の河川班はすでに南海まで仕事を開始した。……中村さんのところに赴き、親族呼称の調査記録を先生に依頼し、午後からの仕事の準備を進む。私は「チーフー」にたのんで近所の大仙を探させたが直ぐに確かめた。彼の兄と共に土壁にかこまれた山路を通り、そこの旅館の入口に立った。「チーフー」の女房と見える女性と会って、中庭で待っていた。あまりにも長々待たせるので応対がなかった。降神してある最中と見え、これではこまるので、もろもろ交換させ、部屋に入ると、拍子拔きの部屋である。（中左）

8月13日9時、医学班は西大樹湾の蒙軍に、心理班の一班は小学校に、他の班は事務所に、経済班は

戸口調査に赴く。私は昨夜の「トゴシンボ」を相手に親族呼称の聞取を行った。「トゴシンボ」は17才の中学出身者で、最近蒙古軍の幹部候補生試験に通り、今後は日本の士官学校に進学しようとしている快い青年である。午前の仕事を終えて、炒飯の昼食をした後、午後の仕事で源平、久保、坂本がきた。望月顧問と官吏会館の族父も同行して来た。16:30 一応の調査が終り、「トゴシンボ」に補完を頼んで、少し休息をとる。(中右)

学術調査隊の総務を務めた泉靖一のフィールドノートは、当時の状況を詳細に伝えている。相馬光明が筆者に提供した写真と泉のノートにあるスケッチとを比べてみると、戦争が激化した状況での物資普及問題について考えさせられる。軍隊が統率する接敵地域であっても、学術調査隊が写真機を使うこと自体はさほど厳しく制限されていなかったことが分かる。ただ、物資不足のため、使えるフィルムに限りがあったことが読み取れる。物資不足の問題は、帰還後の報告書作成にも反映されている。全9冊に分けて執筆された京城帝国大学第三次蒙疆学術調査隊報告は、謄写版で印刷され、後ろには「秘」の字が赤く捺印された(全2010参照)。

戦争物資の不足は帝国全体の命運に直結するため、政府傘下には資源関係の各種研究所が設立された。京城帝国大学には4つの研究分科で構成する大陸資源科学研究所が設立され(1945年6月5日)、今村豊が所長に任命された。この研究所の準備過程の実務は、ほとんど泉靖一が担当した。泉は8月27日に「京城帝国大学大陸資源科学研究所助教授」の任命を受けた。本土決戦が差し迫っていた状況の下、とりわけ沖縄戦が頂点に達していた6月に発足した研究所の助教授職を、敗戦後の8月末に受けたというアイロニーについては稿を改めて述べたい。物的資源の調査の担当は自然科学者たちの仕事であり、人的資源を担当するのが人文系の教授であったが、体質人類学者や文化人類学者は戦闘力に関連する人的資源の内容を直接に取り扱うことになった。大陸資源科学研究所要覧(1945年)には、「戦時下の新しい資材を要求する際に研究所は設立された。……所員は各自従来に属した機関乃至学部のものを利用する状態であった。研究所に付与された使命は朝鮮満蒙北支を一つに繋ぐ強力な自給圏建設を目的とする圏内資源の急速な開発と高度の利用に関する基礎研究である。……所長に3年、所員に2年の任期を付与する。有能でない者は淘汰される。昭和20年6月5日」(今村1945:4)。人的資源の研究は「心理学的社会科学的調査研究」と「医学的人類学的研究」に分けられ、研究計画上、今村は「人的資源としての蒙古人及移住漢人の体能体格の研究」「人的資源としての満洲国内の漢人移住民の研究」「朝鮮人の戦闘力と体格との関係に関する研究」「朝鮮人標準体位の決定」を計画し、秋葉隆には「満洲における移住漢人の社会構造」(泉との共同)、そして泉靖一には「蒙古人の人口、特に幼青年層の実態」「朝鮮における農民離村の研究」および「満洲における移住漢人の社会構造」(秋葉との共同)を与えた。

体質人類学者が「朝鮮人の戦闘力と体格との関係」を研究し、「有能でない者は淘汰」されるという状況は、戦闘中の軍事作戦に当たる軍隊の本来業務と違いがない。京城学派の中心人物たちが軍属人類学を試みたという指摘は避けようがない。それが上層部の強権によるものであれ、誘導された自発性に立脚するものであれ、あるいは積極的な自発性からのものであれ、常に学問的な貞操の問題を考えねばならない学者の立場として

は、致命的な汚点を残したのである。戦争期のスティグマに止まらず、永遠に消せないトラウマとして刻まれたのが京城学派の軍属人類学という捺印ではなかろうか。戦後、朝鮮で成し遂げられた学問的業績について言及されなくなった理由の一つには、このような問題が潜んでいるように思われる。このようなジレンマの状況に客観的に、正面から向き合うことなく学史を研究することは不可能であるような気がする。この問題に関する厳密な分析と検討がない限り、京城学派について語ることは、虚偽を越えた偽善に他ならない。

1940年から45年まで行われた研究実績について整理した日本人類学会の資料を分析すると、一つの興味深い事実が見えてくる。戦前に行われた実績に関する戦後の評価として、日本人類学会は、戦争期の5年間に行われた全25件の体質人類学的現地調査に注目した。その中では「城大解剖」が9件で最も多く、次いで「台大解剖」が5件、その他は各大学に分かれていた（日本人類学会編1955：2-3）<sup>6</sup>。この事実から、我々は3つの現象を確認できる。まず、戦前、とりわけ戦争期の体質人類学研究はいわゆる「外地」で主に行われたことである。伝統的に学問の中心地の役割を担っていた「内地」である東京や京都で実施された業績よりも、「外地」の京城や台北で多くの業績が出たことは、体質人類学研究の需要が植民地と占領地で多かったということと、体質人類学調査が戦争と密接な関連の中で進められたことを暗示する。もう一つは、「外地」の中でも京城帝大解剖学教室の体質人類学の業績が最も多く記録されたのは、今村豊を始めとする京城の解剖学者たちが、戦争の真只中の大陸で多くの調査活動に従事したことである。最後に、「城大解剖」の調査活動は主に複数の研究者による集団的な研究結果であったことである。それは調査活動の対象や状況によるもので、一人では作業不可能な現地の条件に適応した結果だと思われる。その条件とは言うまでもなく、戦闘地域あるいは占領地であったということだ。上記の3つの現象を併せて考えると、京城帝国大学の解剖学教室の体質人類学的調査は、戦争遂行のための戦力と戦略であったことが窺える。

<sup>6</sup> 日本人類学会によって纏められた現地調査の成果は以下の通り（日本人類学会編1955：2-3）。

1941年（1月、朝鮮南部北西部、北東部の朝鮮人、吉野正男：城大解剖；3月、シャム中部と北部のタイとラオー、島五郎：城大解剖；6月、満洲松花江下流、黒龍江沿岸のゴールド、堀井五十雄：京大解剖；夏季、琉球與那国島民、和田格／宮内悦蔵：台北解剖；北京の支那人、小野直治：長崎医大解剖；マイクロネシアのヤップ、パラオとその離島島民、新井正治：慈恵医大解剖；7-8月、南樺太タライカ湖の附近のオロッコ、須田昭義：東大人類；10月、満洲烏拉街、前郭旗の満洲人、支那人、今村豊／鈴木誠／平野伍吉：城大解剖；秋、海南島の黎、金関丈夫：台大解剖；12-1月、南満洲の満洲人、支那人、横尾安夫／椿宏治：東大解剖）

1942年（1月、満洲松花江下流、黒龍江沿岸のゴールド、鈴木誠／平野伍吉：城大解剖；3-4月、海南島三亜港の支那人、回教徒、熟黎、忽那将愛：台大解剖；4-7月、山西省の支那人、山西学術調査研究団人類班 谷口虎年／江口為蔵：慶大解剖；6-9月、華北蒙古の回教徒、須田昭義：帝國学士院東亞諸民族調査委員会；夏季、海南島の黎、金関丈夫／宮内悦蔵：台大解剖；8月、満洲間島安岡県地方、今村豊：城大解剖；8-9月、北京、房山県周口店、長谷部言人：東大人類）

1943年（1-7月、ニューギニア、ヘルシンク湾地方の土民、鈴木誠：城大解剖；7月、満洲黒龍江沿岸、今村豊／坂本和英：城大解剖；8-9月、満洲、横尾安夫：東大解剖）

1944年（3月、広東の支那人、僮民と香港の印度人、忽那将愛：台大解剖；3-5月、中央セレベスのトラジャ、高主武三：マカッサル研究所；8-9月、マカッサル半島のマカッサル、トアラ、トケアー、高主武三：マカッサル研究所；8月、華北黄河南岸、薩拉齋、包頭、百靈廟の支那人、回教徒、蒙古人、今村豊／鈴木誠／杉浦省二：城大解剖）

1945年（2月、ボルネオ、バリト川上流のムルンと中下流域諸族、高主武三：マカッサル研究所；7月、蒙古宣化大同の支那人、回教徒、蒙古人、今村豊／鈴木誠／杉浦省二：城大解剖）

#### 4 廃校と引き揚げ

1945年、京城帝国大学から「帝国」という言葉が消され、京城大学と改名された（8月16日、京城帝大の校門に掲げられていた校牌の「帝国」の文字は、紙で覆われた）。新しい大学の医学部は1945年10月1日に発足した。軍政庁法令（Ordinance）第15号（1945年10月16日）は、Keijo Imperial University を Seoul University に名称変更した。したがって、公文書による京城帝国大学の公式の廃校日は1945年10月16日であり、廃校決定の主体は米軍政であった。続いて京城帝国大学の教授たちに対する免職辞令が発令された。今村豊、島五郎を含む医学部教員28名に対する免職辞令第28号は、1945年11月3日に発令された。

上記のような公的処理が行われる以前に、あまり知られていないが、京城帝大で進行していた事件の一つを紹介したい。人間の歴史は文書のみによるのではなく、それは別に、生きた慣行というものがある。制度的・政治的に緊急な突発状況が発生した際に、生活の慣習の次元で学者たちが反応した移行期の事件を検討することには意味があろう。これは、人間が歴史を作っていく過程における役割と考えられるし、これによって human agency という概念の意味を生かすこともできる。

1945年7月、東京の文部省傘下の民族研究所蒙疆班の一員として派遣され、「8月15日、終戦で蒙疆班に属した小野忍、杉浦健一、徳永康元、佐口透の5名が行動を共にして安東を脱出、8月17日に京城に避難した」（佐口1976:33）。「8月21日、泉氏と会って今村豊博士とともに大学本部で泉氏が持ってきた北京のブランディを飲んだ。その後、今村博士宅に行き、城大の鈴木助教授と一緒に酒宴。蒙疆調査班に関する話をし、今村博士は大東亜戦争中に日本人の学術的業績を多く出版して様々な国に知らせる文化運動として必要なことであると主張する。8月22日、大学本部で泉氏と他の話をし、近い時日に学内で大陸科学研、民研合同で人類学民族学座談会を開催しよう。8月23日、今村先生と一緒に酒を飲んで、泉氏の斡旋で船に乗る問題と出発を論議」（佐口1976:44）。「8月25日、午後3時から城大大陸科学研主催で人類学民族学座談会を開き、小野、杉浦、佐口が出席して経歴を紹介する。集まった人は全部で20余名であった」（佐口1976:45）。「8月29日、大学に行き、泉氏に会う。陳列館に行き、朝鮮土俗資料、ニューギニア土俗品を参観する」（佐口1976:47）。先述の通り、泉靖一は8月27日に京城帝国大学大陸資源科学研究所助教授の任命を受けた。内地の28日は、軍政下の新内閣が公布した国体護持と全国民総懺悔の日であった。無条件降伏での敗戦と混乱の渦中で、今村は京城帝国大学の大陸資源科学研究所の所長として人類学民族学座談会を開催した。

洪水で家が流される部屋の中で囲碁に耽る、という故事が浮かぶ。その内容は定かではないが、人類学民族学座談会の形式そのものは、戦争や支配とは関係のない、実に学問的な貞操を志向する集まりであったと思う。大東亜戦争中の作業ではあったが、学術的な業績だけを考える集まりであったことを想起されたい。彼らは心の重荷を下ろしたに違いない。いまや決戦や戦力、そして検閲や監視とは無縁の、学問的業績だけを志向する素朴な集まりになったと考えたに違いない。人類学は体質人類学、民族

学は文化人類学を意味したことを考えると、1945年8月25日は、帝国日本の人類学が京城学派によって生まれ変わった日であったと言っても過言ではない。流される部屋の中で囲碁に耽るという意味を噛みしめることが、学問的貞操についての議論を支えることになるだろう。

敗戦を迎えた在朝日本人たちは、引き揚げ問題に直面した。引き揚げの手続きを行う「京城内地人世話会」は8月18日に活動を始め、9月2日からは会報を刊行し始めた。9月20日、日本政府の次官会議において引き揚げ事務所が議題となり、10月18日にはGHQが厚生省に引き揚げ業務を担当するよう指令した。引き揚げ事業の基本的な枠組みが整ったわけである。10月11日、京城に移動医療局 (Medical Relief Union: MRU) が開設され、京城帝大の医療陣がこれに加わった。この過程で、京城帝大の教授や学生たちは世話係として業務を手伝い、学生部の総務は横溝が担当した。10月15日の覚書で「内地受入事務所」が設置されることになったが、その一つである博多は、京城内地人世話会の出張所になった (森田 1964 : 336-337)。10月24日、移動医療局の最初の列車が龍山を出発し、引き揚げ者のうちの患者たちを運び出した。医療陣は患者のために列車や船舶に同乗した。博多に入港した患者たちは、聖福寺に設けられた聖福病院 (院長緒方龍、副院長須江柰二郎、写真 34) に入院し、治療を受けた。この病院では、京城女医専や平壤医専出身の医師も一緒に働いた。彼らも皆引き揚げ者であった。緒方龍 (清津赤十字病院長歴任、緒方竹虎の実弟) は聖福寺の檀家総代であり、その縁で聖福寺には日赤博多臨時救護所が設置されていたが、京城の引き揚げ組織が渡ってくると、今度は在外同胞援護会救療部に改組したのである。聖福病院は救療部所属となったが、1947年からは再び厚生省博多引揚援護局に改組された。全国 21 ヶ所にあった地方引き揚げ援護局の一つである博多引揚援護局は公式には 1945 年 11 月 24 日に開所し、1947 年 5 月 1 日に閉所した (Wikipedia 参照)。



写真 34 福岡市にある聖福寺と診療室に使われた建物



写真 35 引き揚げと移動医療局及び学生部に関連する記事 (『京城日報』1945年10月15日付)

今村は博多検疫所の所長職を経て、在外同胞援護会救療部長を務めた。これらの組織を担当する作業は、朝鮮と大陸からの引き揚げ者たちの健康や衛生に直結する問題で

あった。過去 20 年間、城大で担当してきた解剖学とは全く無縁の作業ではあったが、一般的に困難な状況においても、城大出身の医師たちは救療事業に邁進した。聖福寺はそのための作業室でもあり、また彼ら家族の居場所にもなった。今でも博多の聖福寺には、救療事業のために彼らが会合し、診療した場所が当時の状況そのままに残されている。今村は救療部長を務め、泉靖一は庶務課長（当初は田中正四）及び会計課長を兼職し、その組織力を存分に発揮した。患者の診療を担っていた医師のほとんどは城大出身であった。彼らが最も耐え難く感じていたのは、二日市保養所に関連する墮胎手術である。

朝鮮からの引き揚げが終わると、次いで満洲や中国東北地方からの引き揚げ者が入ってきたが（1946 年春）、その患者たちの中には妊婦が少なくなかった。妊婦の中には避難の途上で朝鮮人や中国人、さらにソ連兵士や米軍兵士の強姦によって望まない妊娠をしたケースがあったが、これらの女性たちが引揚船から身を投じて自殺するという事態が生じた。救療部はこの問題の深刻性に気づき、墮胎手術を行うことを決定して二日市保養所を設けた（1946 年 3 月 25 日）。しかし、当時の法律は帝国法令下にあり、墮胎は不法と見なされていた。戦時の人口増加を促進するため、政策の一つとして墮胎が禁じられていたのである。そのことを知っていた医師たちが墮胎手術を忌避したのは障害であった。当時の在外同胞援護会総裁の高松宮が 1946 年 4 月に二日市保養所を訪問して以後、墮胎手術は開始された。手術が不可能な場合は出産させ、孤児院を運営することになった。高松宮に、手術室を訪れて医師たちを励ますよう斡旋したのが泉靖一であった。そして、聖福寺境内の一角に設けられた孤児院（聖福寮）の運営も、泉が中心となった。泉は物資と資金を集める役割に回った。北部朝鮮や大陸から来た栄養失調の孤児が主な受け入れ対象であった。



写真 36 二日市保養所跡地に建てられた「京城帝国大学創立七十五周年記念」碑

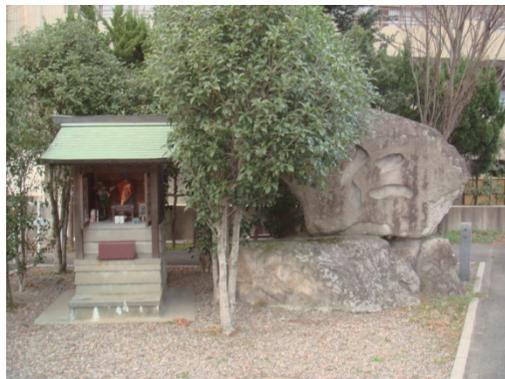


写真 37 同、「仁」碑

驚くべきは、泉が墮胎手術過程についての詳細な写真記録を望んだことである。どんなに悲惨かつ緊急の状況であっても、人々の姿を記録しようとすることは、人類学者としての職業精神の発露とも言えよう。危機人類学とも、非常人類学とも、あるいは災難人類学とも言えるだろう。それは第二次世界大戦終結後、初めて開催された第 4

次世界人類学民族学協会のウィーン会議（1952年）で、Robert von Heine-Geldern 教授（1885-1968）が提案して以来、広く受け入れられてきた緊急人類学（urgent anthropology）という問題意識を凌ぐほどのアイデアであり、行動であった。泉は日頃から親しかった飯山達雄に、墮胎手術の現場、さらに手術完了後の死産した黒と白の二人の胎児の屍までも写真で記録させた（飯山 1979：146）。死産児たちが埋まっている二日市保養所の跡には、現在「仁」の石碑が建てられている。過酷な時期に、耐え難い仕事を甘受した城大出身者たちへの感謝を込めた石碑である。

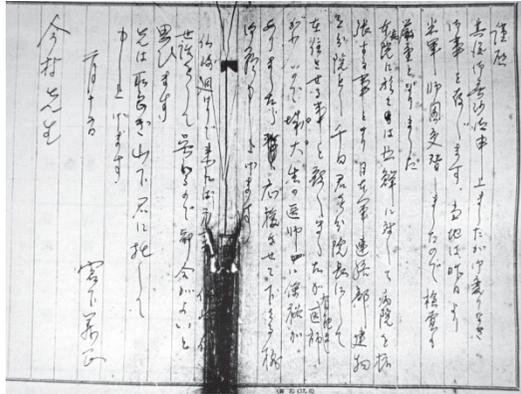


写真 38 今村豊あての公式の手紙  
「京城日本人世話会」宮下義正会長から

謹啓

其後御無沙汰申し上げましたが御変りなき御事と存じます。当地は昨日より米軍師団交替しましたので検査も嚴重となりました

本病院に於ては出鮮に対して病院を拡張する事となり日本軍連絡部建物を分院とし千向（田？）君を分院長にして在住させる事と致しましたが有能な医師が少ないので城大生の医師に余裕がありましたら、応援させていただきます様御願申し上げます。仙崎崎はりで来れば元気？な？仙崎〇が？世話をしてくださるので都合がよいと思ひます。先は取急ぎ山下君に託して申し上げます。

二月十二日

宮下義正

今村先生

（便箋 昭和十七年六月印刷）

宮下義正は京城内地人世話会会長で、書中の「山下君」とは京城世話会が運営する病院の山下道雄院長である。1946年2月、京城の状況を伝え、医師不足を埋めるために城大出身医師の推薦を求める内容である。旧植民地の京城に未だ整理しなければならない仕事が残っており、博多の今村は、旧植民地上部組織である東京の厚生省の管轄機構との間で調整役をこなさねばならない状況であった。

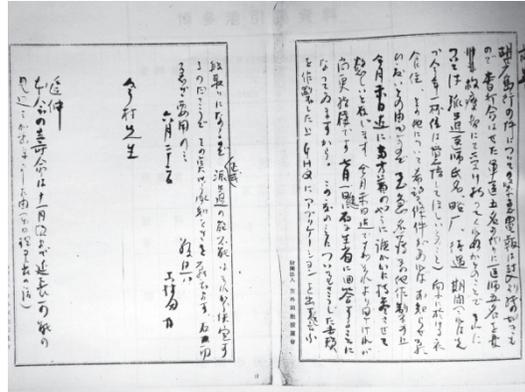


写真 39 今村豊あての公式の手紙  
在外同胞援護会上村忽から

前略

葫蘆島行の件について緊急電報は封入別紙の如きもので、本日打合はせた軍医五名の代りに医師五名を救療部にて受け持ってくれぬかとのことでそれについては派遣医師氏名、略歴、待遇期間（これは先づ今年一杯位は覚悟してほしいとのこと）向ふに於ける衣食住、その他について希望条件があればお知らせ願ひ度いとの由です。至急名簿その他作製の上月末までに当方着のやうに誰かに持参させて欲しいと存じます。今月末日迄ですがそれより早ければ尚更結構です。七月一日迄に厚生省に回答することになってみますから。この度のことについてもさうした書類を作製した上 GHQ にアプリケーションを出すと云ふ段取りになるので正式派遣の能不能はそれから決定するのださうでこの点承知をきを願ひます。右一切急ぎ要用のみ

敬具

六月二十二日

上村忽？ 拝

今村先生

追伸

本命の寿命は十一月頃まで延長可能の見込みが出来ました由（本日理事長の話）

（財団法人在外同胞援護会用箋）

上の手紙は上部機関である在外同胞財団からのものであるが、これも不足する医師の充員がどれほど深刻な状況かを物語っている。とりわけ日本の行政力が及ばない中国側の引き揚げ者の送出港である葫蘆島に、必要な医師を派遣する問題について今村に意見を求め、京城帝大出身者からそこに派遣できる医師の推薦を願っている。追伸にある「本命」という語からわかるように、この手紙は一種公式の命令書の水準であったことも確認できる。送出と引き揚げの中継を円滑にし、当時 GHQ の指令下にあった政府の要請も仲裁しながら、博多の今村は 130 万人以上の引き揚げ者が安全に到着できる基盤を調整する役割を果たした。それは、彼が成し遂げてきた体質人類学の学問的業績よりも、さらに意義のあることであったと認めるべきであろう。

帝国郵便システムが崩壊した上に、これまでなかった国境ができてしまったため、朝鮮から日本に手紙を送ることは不可能となった。京城内地人世話会は、博多の在外同胞

援護会救療部との連絡において、人づてに頼るしかなくなった。引揚船に乗って博多へ入る引き揚げ者に手紙を託す方法であった。上に挙げた前者の手紙がそのよい例である。なお、中国大陸からの引揚船が博多に入る場合も、葫蘆島の連絡係が同じ方法で今村や泉に消息を伝え、意見調整を行った。当時、今村と泉が携わっていたのは、戦後処理の中でも最大の事業であった引き揚げに係わる援護行政であった。共に大陸を巡る学術調査活動によって蓄積された二人の「コンビ」プレーが、このような複雑極まる仕事を成し遂げ得る下地になったと思われる。もちろん、二人だけがこの作業に携わったわけではない。既に言及した城大出身者のほとんどが、長期あるいは短期にわたって一緒に作業していた。その経験がなければ、とても成し遂げられる仕事ではなかった。先に離れた人々は、残って苦勞する人々に見舞いの手紙を送ったりもした。これが、学問以外の領域においても絶えず働いていた京城学派のエネルギーとも言える。ある特別な理論や学風を創り上げた京城学派というより、人間関係を基にした結束力こそが京城学派であると理解する方が正しいと思う。京城学派の絆とも言えるだろうか。このように内実を分析する過程で、我々は、京城学派が見せる日本文化の一側面を読み取ることができるのである。

写真 40 博多入港の引揚船一覽表

写真 41 聖福寮（孤児院）の孤児引取証

写真 42、43 鈴木誠が聖福寺の今村と泉に送った葉書

博多で作業を共にした鈴木誠は、体調を崩して先に帰郷していた。その鈴木誠から葉書が届いた。スケッチが上手であった鈴木が梅花を描いて送ったその心は、恩師や同僚を思いやる絆の表れであった。初春の花の香りが漂う「梅、桜、椿」が書かれた内容からみると、1946年春の葉書であったと思われる。「仙人」とは鈴木のおだ名で、今村は日頃から彼を「仙人」と呼んでいた<sup>7</sup>。ちなみに、葉書に登場する「小林」は小林宏志、「服部」は服部敏、「田中」は田中正四、「緒方」は緒方龍聖福病院長である。

## 5 「復員」：八学連と京城学派

今村が弟子の田中に送った1956年12月8日の葉書には、「小生が第一回の病院船に乗って博多に上陸した日でもある」（田中1972：28）と書かれている。今村は1945年12月8日に、泉は12月18日に引揚船で博多に着いた。1946年10月1日現在の日本人類学会の住所録には、今村と泉の住所が「福岡市御供町聖福寺内 在外同胞援護会救護部」と記されている。1947年初め、今村は広島大学の解剖学教授に転職し、泉は在外同胞援護会の東京事務室に籍を移した。引き揚げ関連の援護事業に参加していた京城帝大の人員の中で、二人が最も遅く離れたわけである。しかし、非常時に家族ともども生死苦楽を共にしたことが忘れられることはない。

戦後処理の最優先課題は、民間人の引き揚げと軍人の復員であった。陸軍省は第一復員局、海軍省は第二復員局と縮小改組され、戦場に散らばっていた将兵たちの帰国を急いだ。無論これは、民間人の引き上げに優先される作業であった。ところで、復帰と復員とはその意味が異なる。復帰は元の位置に戻るという意味で、復員は軍人の帰国を意味する。京城学派には復帰する場所がなかった。そのため、私は京城学派に復員という言葉を用いたい。

京城帝大の秋葉隆の場合、彼の研究室は陳列館（博物館を指す）であった。教授職を免職された彼は、引き揚げ列車に乗る準備をしながらも、早いうちに京城に戻るつもりであった。それで彼は最も信頼していた宋錫夏を呼び、自身が戻るまで書籍や資料や陳列館の管理を頼んだという。また、鈴木誠の夫人の父親は仁川生まれで、彼女も同じく仁川が生まれ故郷であった。鈴木誠と結婚し、間もなく敗戦を迎え、内地に帰らねばならないと言われた。仕方なく当分の間は避難するが、後日、再び「故郷」仁川に戻るつもりであったという。このように、京城帝大出身者とその家族には、復帰する場所がなかった。したがって、復員という言葉がせめてもの使用可能な代替用語であると思う。

敗戦後の廢墟においては、もともと勤め口が少ない上に、外地から帰国する人々がますます増えてくると、彼らに回ってくる職場はほとんどなかった。もともとの内地人のポストが偶然にも空くの待つかなかった。戦後の福岡には屋台が立ち並んだという。昔の故郷に帰れない人々は、屋台で賄うしか生きるすべがなかった。学界も事情は同じ

<sup>7</sup> 1961年1月20日、津にいた今村が田中に送った葉書から「1月15日に信州の鈴木仙人が来た」（田中1972：43）という内容が窺える。また、他の葉書の中で今村は「あの男に會うとこつちまで嬉しくなる」（田中1972：25）と、鈴木に関して記していた。

であった。突然、外地から学者たちが押し寄せてくるという状況において、新たな職を得るのは至難の業であった。著名な学者たちには新たに登場したGHQ関連の仕事があったが、そうでない若い研究者は、臨時職やパートタイマーであっても喜んで受け入れた。京城帝国大学の教員には、再編成された広島大学や長崎大学に職を得る場合もあった。偶然かも知れないが、両大学とも原爆投下地であったという共通点を持つ。

京城学派と言われた人々が再び集まることになる公的な機会は、八学連が1950年の春に発足させた対馬島調査であった。筆者が表1で提示したように、表の中央の点線から左側は戦後の活動を示している。とりわけ対馬島調査団の構成をみると、京城学派の人員が重要なポストに就いているのが分かる。当時、その組織の実質的な背後には文部省傘下の人文諸科学委員会があり、その委員長が尾高朝雄（東京大学法学部教授）であった。彼は長期間にわたって城大法文学部で教授職を務めるなど、事実上、泉靖一の親分に当たる存在であった。「民族学、民俗学、言語学、人類学、考古学、社会学の六学会連合から始まり、それに宗教学や地理学を入れて八学会連合が組織された。『人文科学の諸問題』と『人類科学』という二冊の本を大会の報告として刊行したが、対馬は大陸文化と日本文化の交流点であり、……戦争中には要塞地帯であったが、……学術調査は処女地であった。研究費は文部省の科学研究費で賄った。……委員長は渋澤敬三であり、……全体の世話役には、このような大規模の調査における経験が豊かな民族学協会の泉靖一が推薦された。……John Bennetを中心とする総合調査の方法を考える研究会とも懇談会があって、1950年2月末から3月にかけて対馬に行ってきた泉靖一と金田一春彦が現地予備調査報告会を行った」（小堀1951：5-6）。

調査団の委員長は辻村太郎（地、東大）、副委員長は3人で今村豊（人、広大、現地調査隊長）、北村精一（人、長大、長崎大学班長）、古野清人（宗、九大、人文諸科学班長）であり、幹事長は泉靖一（族、明大）、幹事2人は鈴木二郎（族、早大）と小堀巖（地、東大）、助手は蒲生正男（人、広大）という構成であった。八学連というが、実際に調査団に参加した中心メンバーの顔触れをみると、人類学会と民族学会が主軸であったことが分かる。上に記した8人のうち、京城学派に属するのは今村豊、北村精一（皮膚科専



写真44 1952年10月、人類学会・民族学会連合大会の時に撮影された写真



写真45 2004年1月、鈴木淑子（当時84歳）の家で筆者と共に

写真44の幼い女の子が右の女性で、鈴木誠の娘に当たる。

門で京城帝大病院長を歴任し、引き揚げ後は博多の聖福病院に短期間籍を置いた)、泉靖一、蒲生正男である。小堀の証言からわかるように、実際にこの組織構成を行ったのが泉であったことは間違いない。今村の名義で提出された「形質人類学的研究」の報告書(今村 1954)には、鈴木誠や池田次郎を含む城大の弟子たちの名前が散見される。

戦後の混乱の中、引き揚げ問題がある程度落ち着いた後、京城学派の構成員たちはそれぞれの個人的な生活に戻った。今村は広島大学、島は大阪市立大学、鈴木は信州大学、泉は明治大学を経て東京大学にポストを得、個別の活動に取り組んだ。一枚の写真は、参集した京城学派を物語るに十分である(写真 44)。1952年10月、信州大学での人類学会・民族学会連合大会を終え、皆が上高地にエクスカージョンに行く途中で撮られた写真の中の一枚である。二人の子供と手前に座っている人物(?)を除くと、後ろに二列で並んでいるのは、前列左から秋葉夫人、秋葉、鈴木夫人、今村、鈴木であり、後列左から島、蒲生(、不明)である。私はこの写真を、2003年9月に秋葉教授の娘である秋葉萬里子氏から譲り受けた。そして2004年1月、筆者がこの写真を鈴木夫人に見せた時、彼女は秋葉夫婦を認知できなかった。これは、秋葉が京城帝大の解剖学教室の研究者たちと深い関係を結んでいたわけではなかったことを間接的に物語っていると思われる。鈴木夫人は蒲生についてはよく知っており、蒲生(1928年生まれ)の師である泉が当時ブラジルへ出張中であったことも記憶していた。そのため、「夫の無二の親友」である泉の姿が見当たらない、と説明もしてくれた。

私は1998年6月に、東京の伝通院で開かれた故蒲生正男の16周忌に朝倉敏夫教授のご厚意により参加し、蒲生夫人から興味深い話をうかがった。蒲生は明治大学社会学教室の出身で、泉靖一の弟子であった。彼が明治大学を卒業する時、泉は広島大学の今村に電話で、「若者に食わせてやりたい」と頼んだという。それで蒲生は広島大学の医学部解剖学教室に月給七千円の副手ポストを得、すぐに結婚して広島で生活を始めた。当時、蒲生夫人が不思議に思ったのは「なぜ、社会学教室出身者を解剖学教室に就職させるのか」ということであった。普通では思いつかないことが、京城学派内で、そして今村や泉の間では可能であった。

戦争の緊急の後遺症がある程度整理されると、日本政府は米軍政との協議の下、日本全域にわたって人体測定を行う事業に取り組んだ。事業の担当は文部省であった。「班員による生体計測終了地及昭和二十六年度予定地」(附・全国地方県別図)に記された対象地域と担当者を見ると、北海道地方・富山県・岐阜県・近畿地方は全て京城学派に属する研究者である。「今村」は今村豊、「島」は島五郎、「上田」は上田常吉、「小濱」は小濱基次に他ならない<sup>8</sup>(文部省科学研究生体測定班 n. d.)。東北地方、関東地方、四国地方、九州地方などには他の研究者が配置された。

「免許のない医者同然」と自己紹介する香原志勢(1928年生まれ、立教大学名誉教授)は、東京大学の理学部人類学教室出身で朝鮮戦争の間、死体研究者とあだ名がついた体

<sup>8</sup> 北海道地方：奈良県移住民部落(班員 今村)、富山県移住民部落(班員 島)；富山県：西礪波郡廣瀬村(班員 島)；岐阜県：山県郡谷合村(班員 島)；近畿地方：滋賀県湖東・湖北・湖南(班員 小濱)、京都府北部・中部(班員 上田)、兵庫県三原郡(2)(班員 島)、三重県(10)(班員 島)、奈良県添上郡(班員 上田)、6所(班員 小濱)、吉野郡十津川村(班員 今村)、大阪府2所(班員 島)、和歌山県5郡(班員 上田)(文部省科学研究生体測定班 n. d.)。

質人類学者である。彼は泉靖一の斡旋で信州大学の医学部解剖学教室の助手に就職した。その教室の教授は鈴木誠であった。下記は鈴木誠の履歴書の内、戦後の現地調査部分だけを抜粋したものである。

- 1949 夏 経済安定本部資源調査会 総合調査（北海道樺戸村新十津川で奈良県十津川村移住民の体質人類学的研究）
- 1950.7 八学会連合 対馬 共同調査
- 1952.7 長野県上伊那郡藤澤村 村民生体計測
- 1952.8 新潟県中頸城郡上郷村 村民生体計測
- 1953.5 長野県西筑摩郡新開村 村民生体計測
- 1955.7 今村豊教授還暦記念 佐渡島 人類学的総合調査
- 1955.8 長野県南佐久郡川上村 村民生体計測
- 1955.7-8 「混血アイヌ研究」（北海道日高地方 アイヌ調査）
- 1959.8-12 ソサエティー島・マルケス島 人類学的調査
- 1961.7-10 大阪市立大学 南太平洋学術調査隊（島五郎隊長：ソサエティー島、ツアモツ島、ツブマイ島、サモア島、ニュージーランド、フィジー島 人類学的調査）
- 1965.6-10 大阪市立大学 第二次南太平洋学術調査隊（島五郎隊長：オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ合衆国、フィジー、トンガ、ハバラ島、サモア島 人類学的調査）。

香原志勢は50-60年代に行われた生体計測や人類学的な調査に参加したため、島五郎についてもよく知っていた。京城学派の構成員たちは戦後も機会があれば一緒に「城大会」の中心として働き、飲酒同宿した。そして、協力して彼らの弟子たちを育てようとし、戦後においても京城学派の末裔を残していた。

京城学派の学界復帰は今なお未完成であり、その進行が待たれている。彼らには未だなしえていない、しかしせねばならない話が残っている。当事者たちはすでに故人となったが、彼らが残した遺品や著作や遺言は現存する。記録や記憶、そして遺品によって再構成される京城学派の真の復元は、日本人類学史を整理する過程の一脈であるに違いない。生前にできなかった話は、腹話術を用いても公表する場を設けるのが後学の責任であると思う。その過程がないままでは、日本人類学史の整理は不可能であるというのが私の信念である。「群像」次元の整理では学史になりえない。それは学史へと至る中間段階の作業ではあるが、一段落着いた水準とは思えない。最小限かつ粗雑であっても、「系統」を貫く作業が先行しなければ、日本人類学史は本当の姿を呈することができないと思う。最近、国立民族学博物館などの長期にわたる努力の末に発刊された『日本の人類学』（山路 2011）も「群像」形の一つに過ぎず、「系統」形に近接したものとは言い難い。

## 6 結語：告解聖事と遺産

私は戦時人類学の分野で一定の役割を遂行した京城学派に関して論じた。だがそれは、倫理的文脈での議論ではなく、戦争遂行の途上で進められた学問的な業績に関わる議論であった。戦時人類学の倫理問題に対しては、別次元での慎重な議論が必要であると思うため、本稿の結論の一部として、その糸口を提供する機会を得たい。

京城帝大の法学部で、法哲学と法社会学の講義を担当していた尾高朝雄は、学生たちの広範な人気を得た教授であった。尾高は、日本の資本主義の中核人物とも言われる渋澤栄一の孫にあたり、その名前からも分かるように朝鮮（釜山）生まれであった。尾高は総督府でも理論的な思想家として名声を得ていた。戦争局面が悪化していくと、彼の役割は思想先導の方向へと舵を切り、ついには、ヒトラーを中心とする第三帝国をその喩えとして、全体主義を賞揚する文章（尾高 1940.5.20、1940.6.20）を一般人向けの雑誌や新聞に書き始めた。三国同盟と総力戦、それらを果たすための「内鮮一体」を背景にした彼の主張は、彼が 1944 年 4 月、東京帝国大学法学部に赴任するまで続いた。植民地や占領地という状況においては、真実よりもイデオロギー的な扇動がより重要であったし、思想的なヘゲモニーをめぐる企画戦略は、戦線か銃後かを問わず、決戦のために働いたのであった。その状況が一変した時、当事者たちがいかなる反応を見せたかについて、具体的に質問し答えを得ることは期待し難い。しかし、過去の場合を回顧する機会を得た時、当事者たちの反応は、学問的な貞操を考える我々にとって一つの希望をもたらすメッセージを含んでいる。

「戦争がひどくなつて……軍の要請で、文部省に民族研究所が作られたんです。終戦後、この研究所は、「戦犯的組織」というのですぐ解散させられましたが、私たち研究者は、相手の文化を認め理解する立場をとっていたので、始終軍との間で衝突、矛盾をくり返していました」（泉 1966：150）。泉のこのような評価の観点は、自らが参加したニューギニア海軍調査隊に関しても一貫する文脈を持っている。「調査隊の派遣主体は、海軍のニューギニア民政局であったし、資源調査が重点であつて人間に関する配慮は全然無かった。私が修正要請をしたのは、原住民の福祉や生活の向上を願う人類学上の調査をするためであった。被占領地域の住民に関する考慮は必要ないとする、簡単な答辯が届けられた」（泉 1971：163-164）。組織の次元も個人的な次元も皆同じであつたという話である。「その時の調査研究は、自らの国内国体を棚上げにしたまま「共存共栄」を押し立てて侵略主義の先鋒で……調査に携わつた多くの無垢な学徒の内面的な矛盾の悩み」（石田 1948：85）を放棄することはできない。もし、現在の我々が、当時の研究者たちがぶつかった矛盾した壁に目をそらしたら、同じような状況が訪れた時、同様の矛盾に溺れてしまうだろう。また、「矛盾した壁にぶつかった」悩みに苦しんだ先学たちは、当時の政治の犠牲者でもあつたという点を認めねばならない。もし誰かがこれを否認するなら、その行動そのものが、体制の犠牲になった人々をもう一度犠牲にさらすことになるだろう。先学たちが悩んだ過程を教訓とし、将来における学問的な貞操について、堂々たる態度で臨む智恵を学ぼうと努力しなければならない。

ニューギニアから戻つた泉は、「私がニューギニアの海軍資源調査探検隊であつたこと

を忘れてはいけない。最後に、民族の指導は徹底的な理解を基礎にしなければならない」（泉・鈴木 1944：134）と絶叫した。海軍資源調査探検隊の隊員でありながら、原住民を理解しようとする試みは、矛盾への葛藤の表れである。戦力のための調査が、原住民に対する理解と共有できる接点は果たしてありうるか。戦争に動員された研究者が抱いた悩みが読み取れる。さらに、京城学派の座長であった今村は、「我々が朝鮮時代を反省するのに、あれよりひどかったことはない。個人としても国としても弱者にはなりたくないものだ」（田中 1972：24）と回顧している。今村の告解聖事は、幾度でも熟考に値する。

人類学分野の「京城学派」は、満洲事変以来の戦争中に誕生したというのが、本稿の結論である。総力戦体制下で文科系と理科系が連合して学術調査を構成する過程から胎動し、京城帝国大学医学部の解剖学教室で体質人類学を中心に活動していた今村豊をはじめ、植民地での京城人脈によって構成された。しかし、「京城学派」が一つの慣用語として語られた例はなかなか見当たらない。さらにその内実について詳しく知る人々も非常に少ない。しかしながら、その語が使われてきたのは自明であり、京城学派の座長は今村、事務局長格は泉であったという証言も確保されている。今村は京城帝大解剖学教室教授として勤めた20年間、主に体質人類学の分野で業績を残した。泉は京城帝大法学部で社会学や文化人類学や民俗学を修め、戦後は東京大学の文化人類学研究室で主任教授を歴任した。このように体質人類学者と文化人類学者が結びついた京城学派は、人類学を志向していたと結論付けても差し支えないと思う。

以上のような結論に疑問を抱く方々のために、次のような言葉を伝えておきたい。彼らは朝鮮だけではなく、満洲や蒙古を含む大陸を舞台に、数年をかけて総合的な共同研究を遂行した。とりわけ戦場の真只中を潜り抜けて成し遂げられた共同研究は、生死と苦楽を共にする体験に他ならない。京城学派の特徴は、学問的な成果にとどまらず、人間的な「コネ」とも深く関わっていることに気付くべきだと思う。彼らは共同で学術探検を遂行しただけではない。銃弾が飛び交う戦場の死線を共に乗り越え、戦後の引き揚げの際には秘密結社のような特殊任務に携わり、家族もろとも生死と苦楽を共にした。

敗戦から廃校、そして引き揚げと復員、そのような前代未聞の相次ぐ惨めな状況の中で、彼らの「コネ」はさらに強固になっていった。大陸を舞台に共同学術調査の基盤を提供した物理的な根拠である京城帝国大学は廃校になったが、京城学派は戦後になって、より鮮明かつ確実な姿で登場した。京城帝国大学というハードウェアは消滅したが、京城学派というソフトウェアはさらなる成長を遂げた。今村豊が中心となり、解剖学教室の島五郎・鈴木誠、法文学部出身の泉靖一らが、人間関係というソフトウェアの核心を構成していた。戦後初期から「京城学派」という言葉を主に駆使したのは島五郎であろう（香原志勢の証言）が、人間関係の実質的な形をとって行動したのは今村と鈴木、そして泉であった。京城学派は、人間関係の絆という形で一つの学派として認識されるようになった。

戦前において「京城学派」という語の用例は見当たらない。「京城」という単語が一つの集団を示す言葉として初めて登場したのが「京城組」であったと思う。この、ニューギニア時代の「京城組」から、「京城学派」へと進化したのではないか。前者が外部の人々の評価から現れた言葉であるとしたら、後者は内部からの、自らのアイデンティティを

表す用語として使い始められたと思われる。「組」から「学派」への転換には、外部の評価だけでなく、その評価に対する内部からの認識も働いたはずである。戦後、日本の人類学会が描いた全般的な構図の中から「城大解剖」の際立った業績が物語るように、京城出身者たちは社会的な次元での一つの「組」ではなく、学界の中で優れた業績を誇り、同質的な学問の傾向を抱く集団として認識された。「学派」という用語の使用は、そのような認識の確立に役立ったと思う。このような文脈からみると、今村を座長とした京城学派の中身は人類学、とりわけ体質人類学を示すに相違ない。

しかしながら、それが体質人類学に他ならないと結論づける際に、一つ留保される問題がある。京城学派の事務局長の役割を担った泉靖一が存在がそれである。今村を除いて京城学派を想定することが出来ないのと同じように、泉もなくてはならない存在であった。彼は体質人類学中心の京城学派の中で、事務局長の役割を務めた文化人類学者である。したがって、私は京城学派の内実を単純に体質人類学に限定しようとする主張には異論を持つ。厳密に言えば、解剖学教室の出身者で体質人類学を学んだ人といえども、体質人類学だけに専念したわけではない。そのため、京城学派の内実は、体質人類学と文化人類学とを跨ぐ人類学として認識されることを希望する。これは学史を纏める後学としての評価であり、このような観点からの評価が蓄積されることは、全体的な日本人類学史のスケッチの完成に役立つと思うからである。

京城学派の学問的な貢献について語るならば、私は巫俗研究と人骨研究の2つを挙げたい。前者は宗教及社会学研究室の赤松智城と秋葉隆によって果たされた作業であり、後者は解剖学教室の今村豊を筆頭として達成されたものであった。そのきっかけとなったのは、満洲事変の後、京城帝国大学に結成された満蒙研究会であった。両者の関係は、彼らの弟子の役目を担った泉靖一によって強まった。そして、このことが京城学派の特徴であった。つまり、泉の活躍がなければ、今日の我々は、今村の体質人類学をもって京城学派の中身を論じるしかなかった。泉という存在と彼の架け橋的な役割があったからこそ、彼の恩師でもある赤松と秋葉の業績を京城学派人類学の中に集める (reimburse) ことができた。また、それが文化と体質を跨ぐ広義の京城人類学派について言及し得る根拠を提供していると筆者は見るのである。京城学派のそのような気風は、戦後、数回にわたって行われた全国的な総合学術調査にも一定の影響を及ぼしたことを指摘しておきたい。

京城学派が残した遺産としては、3つの点を指摘することができる。第一、戦後の日本学界に一定の影響力を及ぼした。戦争の影響、即ち総力戦体制下で文科系と理科系が結び合う方式が、総合学術調査という形であらわれたのである。このような試みは、京城帝大で満洲や大陸を舞台に行われた調査方式を踏襲していると評価できる。また、このような共同方式によって中心軸を確保した「京城学派」の活動は、後日、戦後日本の学界に少なからぬ影響を及ぼした。その例として、八学連-九学連の活動において京城学派のメンバーが中心的な役目を果たしたことを思い出せばよい。第二に、今村豊と京城学派の人骨研究が我々に与えた課題は、彼らが残した資料を現代的な文脈での体質人類学的観点に立脚させ、新たに研究する機会を設けることであると思う。そのためにはまず、今村が蒐集した700体に及ぶ人骨の行方を探し出さねばならない。それが可能にな

れば、今村の夢は南柯一夢として済まされえない。第三に、戦後の韓国における研究傾向に及んだ影響を看過できない。京城帝国大学の解剖学教室に在籍し、今村豊の弟子であった羅世振（当時、創氏改名して西木世振）は、解放後に開校したソウル大学校医科大学の解剖学教室の教授に任じられた。彼は、今村の古墳出土の人骨研究に伴っている（羅・張 1967）。さらに、羅世振は解放後の朝鮮で結成した朝鮮人類学会（後に大韓人類学会に改称）の体質人類学部長を務めた。解放後の韓国で進められた体質人類学的な研究の歩みが、今村の遺産といかに、そしてどれほど繋がりを持っていたかについて、具体的に整理するという課題も残っている。私の先輩たちは、羅世振先生から「体質人類学」の講義を受けてきたが、私は 1968 年度にその授業を医科大学の解剖学教室で、張信堯先生から学んだ。その時、まる一学期を、人体を構成する骨の名称を覚えるのに費やした。それはまさに骨学であった。

## 謝 辞

本稿の完成にあたっては、下記の皆様のご協力と激励があった。この場を借りてお礼を申し上げたい。インタビューに応じてくださった香原志勢先生、泉靖一のフィールドノートと日記資料を提供してくださった泉拓良教授（京都大学）、鈴木誠が残した資料を提供してくださった鈴木淑子夫人（長野県松本市）、蒙疆学術探検隊の写真資料を提供してくれた相馬光明博士、秋葉隆に関する写真資料を提供してくださった秋葉萬里子様（横浜市在住）、福岡市のふくふくプラザに保管されている引き揚げ事業に関する資料の閲覧の便宜をはかってくださった張正好先生（福岡市社会福祉協議会）、聖福寺を案内してくださった大野左千夫先生（大阪）、難解な文章を解説してくださった安溪遊地教授（山口県立大学）、福岡で資料収集を手伝ってくださった松原孝俊教授（九州大学）、京城帝国大学の卒業生との面談を斡旋してくださった高杉志緒准教授（下関女子短期大学）、パプアのピアクでガイドしてくださった Umberto Arwam 先生、ソウル大学校博物館の写真資料を提供してくださった宣逸学藝士、図書館で新聞資料の調査を手伝ってくれた金志恩君（ソウル大学校人類学科院生）に感謝する。ソウル大学校図書館の係員、国立民族学博物館図書室の関係者、東京大学総合図書館と文化人類学研究室図書室の関係者、九州大学図書館の係員の皆様のご助力も忘れ難い。さらに、いつも筆者の愚問に対して賢答を下さり、アイディアをいただいた伊藤亜人教授（早稲田大学）や中生勝美教授（桜美林大学）には、深甚の謝意を差し上げたい。

## 参考文献

- 김옥주 2008.12 「경성제대 의학부의 체질인류학 연구」『醫史學』17(2): 191-203.
- 羅世振・張信堯 1967 「黃石里第 13 號支石墓에서 出土한 古墳骨의 一例」『韓國支石墓研究』國立博物館古蹟調査報告書 6: 125-135.
- 全京秀 2010.3.26 「京城帝國大學の學術調査と‘京城學派’の誕生：人類學分野にフォーカスを合わせて」『朝鮮學報』214: 1-62.
- 天野利武 1939.10.1 「學生大陸學術調査團の‘行動と收穫’に就て」『城大學報』30 号。
- 荒瀬進・小浜基次・田辺秀久・高牟礼功 1934 「朝鮮人の体質人類学的研究—第一回報告（北鮮の部）」『朝鮮医学会雑誌』24: 60-110.

- 荒瀬進・小浜基次・島五郎・西岡辰蔵・田邊秀久・高牟禮功・川口利次 1934 「朝鮮人の体質人類学的研究—第二回報告」『朝鮮医学会雑誌』24：111-153。
- 飯山達雄 1979.10.20 『敗戦・引揚げの慟哭』東京：国書刊行会。
- 石川健治 2006 「コスモス—京城学派公法学の光芒」酒井哲哉責任編集『岩波講座「帝国」日本の学知1「帝国」編成の系譜』岩波書店。
- 石田英一郎 1948.3 「民族學の發展のために：編輯後記」『民族學研究』12(4)：81-86。  
——— 1964.7 「？」『研究室だより』9：12。
- 泉靖一 1964.7 「？」『研究室だより』9：14-17。  
——— 1966.2 「文化人類学者の世界的使命を」『展望』86：150-151。  
——— 1971 『遙かな山やま』東京：新潮社。
- 泉靖一・鈴木誠 1944 『西ニューギニアの民族』太平洋協會編、東京：日本評論社。
- 今村豊 1931 「朝鮮雄基貝塚及び新羅古墳骨に就て」『解剖學雑誌』4(4)。  
——— 1932 「朝鮮咸鏡北道雄基近郊で發掘された石器時代人骨について」『人類學雑誌』47(12)：447-469。  
——— 1933 「樂浪古墳骨の一例」『人類學雑誌』48(1)：38-42。  
——— 1934 「内蒙古人計測旅行雜記」『ドルメン』3(10)：725-729。  
——— 1938.1.11 「巨人會と光頭會」『大阪朝日新聞（南鮮版）』20196号。  
——— 1939 「滿蒙民族の體質」『京城帝国大学滿蒙文化研究会パムフレット 第3冊』京城帝国大学大陸文化研究会。  
——— 1943.2.9 「頭寒足熱（上）」『京城日報』12677号。  
——— 1943.2.10 「頭寒足熱（下）」『京城日報』12678号。  
——— 1943.5.30 「決戦體制下の學徒體育」『京城日報』12787号。  
——— 1943.6.20 「序言」『朝鮮に於ける人口に関する諸統計』朝鮮厚生協會編、朝鮮總督府警務局内朝鮮厚生協會發行。  
——— 1943.12.7 「決戦第三年の心構へ」『京城日報』12977号。  
——— 1945 「設立趣旨」『大陸資源科學研究所要覽（昭和20年）』京城：大陸資源科學研究所。  
——— 1954 「対馬島民の形質人類学的研究」九学会連合対馬共同調査委員會編『対馬の自然と文化』東京：古今書院。
- 今村豊・島五郎 1938 「蒙古族及び通古斯族の体質人類学的研究補遺 其3」『京城帝国大学滿蒙文化研究会報告 第4冊』京城帝国大学滿蒙文化研究会。
- 大西雅郎・鈴木誠 1941.11 「蒙古人、支那人及び朝鮮人頭蓋諸骨の人類學的研究」『人類學叢刊：甲』人類學：第3冊、東京：日本人類学会。
- 尾高朝雄 1940.5.20 「全體主義に就いて（一）」『朝鮮電氣雑誌』29(5)：2-12。  
——— 1940.6.20 「全體主義に就いて（二）」『朝鮮電氣雑誌』29(6)：7-15。  
——— 1941.10.17 「時代と青年の雙肩に」『京城日報』12201号。  
——— 1942.2.11 「學徒に望む（上）」『京城日報』12317号。  
——— 1942.2.12 「學徒に望む（下）」『京城日報』12318号。  
——— 1942.5.19 「道義の理念と徴兵制度」『京城日報』12413号。
- 木下眞澄 1939.5.1 「興安東省内に居住する民族並に衛生地誌の概況」『滿洲國軍醫團雑誌』27：85-97。
- 木村邦彦 1983 「誄島五郎先生」『人類學雑誌』91(3)：303-308。

- 久保武 1919.2.10 「朝鮮人の人種解剖學的研究」『現代之科學』7(1) : 81-90。
- 小堀巖 1951.5 「八学会の対馬調査はどのようにして行われたか」『人文』1(1) : 4-21。
- 彩雲學人 1936.4.5 「城大醫學部の横顔 (五)」『朝鮮及滿洲』341 : 36-38。
- 佐口透 1976 「1945 年滿鮮紀行：終戦前後の日本海域」『日本海文化』3 : 33-51。
- 座談會 1944.2.21 「ニュー・ギニア學術探検」『改造』26(3) : 49-63。
- 島五郎 1957.11 「今村豊先生還暦祝賀論文集の発刊に際して」『人類学輯報』18、新潟大学医学部解剖学教室。
- 鈴木昇 1939.10.1 「蒙疆の‘民族と政治’」『城大學報』30 号。
- 鈴木誠 1943 「赫哲調査報告：頭蓋骨」『人類學叢刊：甲』人類學：第 5 冊、東京：日本人類学会。  
—— 1943.12.19 「ニューギニア點描」『週刊朝日』pp. 13-14。
- 鈴木誠・平野伍吉 1942 「赫哲調査報告」『人類學雜誌』57(4) : 147-154。
- 相馬光明 1995.3 「藤本英夫著〈泉靖一伝〉：書評」『紺碧』124 : 10-11。  
—— 1993.1.29 『ヒマラヤへの道』東京：診断と治療社。
- 竹田光次 1943.8.10 『南方の軍政』東京：川流堂小林又七。
- 田中正四 1944.3.1 「適應性：カナカ族・インドネシア族・パプア族・日本人」『城大學報』79 号。  
——編 1972.3.15 「片地書」『今村豊先生書翰集』。
- 寺田和夫 1975.8.5 『日本の人類学』思索社。
- 匿名 1943.5.15 「戦時體制に即應する國民體育」『通報』140 : 10-13。
- 中野朝明 1942.6.20 「南部諸民族の生態、附文化變化の問題」平野義太郎編『フィリッピン naturally 自然と民族』  
東京：河出書房、pp. 307-326。
- 日本人類學會編 1955.7.15 「人類學の概観 (1940-1945)」東京：日本學術振興會。
- 藤本英夫 1994 『泉靖一伝：アンデスから済州島へ』東京：平凡社。
- 堀井五十雄・正木正明・宮本潔 1942 「赫哲族調査報告」『人類學雜誌』57(9) : 377-385。
- 滿洲民族学会 1943.1.1 『滿洲民族學會 會員名簿』。
- 森田芳夫 1964 『朝鮮終戦の記録』東京：巖南堂書店。
- 文部省科学研究生体測定班 n. d. 『昭和 26 年度第一回 生体測定班會議記録』(謄写版)。
- 山路勝彦編 2011.7 『日本の人類学』西宮：関西学院大学出版部。
- 山本昇 1940.9.1 「オロチョン族の醫學的調査報告 (1・2・8・9)」『滿洲國軍醫團雜誌』35 : 1-42。  
『大阪朝日新聞 (南鮮版)』1941.8.26 「東部シベリアを覗く」。  
『京城日報』11557 号 (1940.1.8)、11635 号 (1940.3.26)、13106 号 (1944.4.15)。  
『城大學報』74 号、1943.10.1。  
『朝鮮』351 号、1944.8.1。  
「東京人類学会創立五十年記念大会順序書」『ドルメン』3(4)、1934. 4。
- Doi, Naomi 1991 “Morphological Data on the Skeletons of the Kanaseki-family,” *Journal of Anthropological Society in Nippon* 99(4): 483-496.

(原文：韓国語、日本語訳：金炳辰)